

人民の指導者

偉大な指導者金正日同志の生誕80周年に献呈

人民の指導者

朝鮮民主主義人民共和国・外国文出版社
チュチェ111(2022)

はじめに

偉大な金正日(キムジョンイル)朝鮮労働党総書記は、金日成(キムイルソン)主席によって拓かれたチュチェの革命偉業を勝利に導いた傑出した指導者であり、人民の慈父であった。

金正日総書記は、激動する出来事に満ちたすぐる20世紀、2度の革命戦争と複雑多端な新社会建設の環境の中で成長し、人民と喜びも苦しみも共にしながら高邁な人民的風格をはぐくんだ。

総書記が党と国の全般的活動を指導するに及び、革命と建設の全般的領域に根本的な変革が生じ、労働党時代の大全盛期が出来した。

とりわけ総書記は、1990年代中期、先軍革命指導をもって敵対勢力の反朝鮮孤立圧殺策動を粉砕することで、社会主義祖国を立派に守り抜き、社会主義強国建設の飛躍台を築いた。

総書記は革命を指導した全期間、人民を最大に愛し慈しみ、常に人民の中で過ごし、生を終える最期の日まで人民の生活の向上をはかって不眠不休の労苦と心血を注ぎ、超強度の現地指導強行軍を休みなく続けた。

わが一生を集約して顧みれば、そこには人民というもののほか

に残されたものは何もないと述懐していたように、総書記の思索と実践は、ひとえに人民とつながっていた。

それが故に朝鮮人民は、祖国繁栄の大いなる歴史をつくり上げていく総書記を人民の指導者としてあがめ、ひたすらその指導に従ったのである。

祖国の興隆と人民の幸せをはかりわが生涯を捧げた総書記の不滅の業績は、民族の歴史と共にとわに伝えられるであろう。

目 次

1

成 長

1940年代初めに至り、朝鮮人民の抗日武装闘争は金日成主席の指導により、祖国解放の大事を十分な準備のもとで迎えるべく、大部隊を小部隊に編成変えして積極的な政治・軍事活動へと移行していた。

そのような時期の1942年2月16日、金正日総書記は白頭(ペクトゥ)山密営で誕生した。父親は、朝鮮人民が伝説的英雄、民族の指導者として仰いでいた朝鮮人民革命軍司令官金日成将軍であり、母親は抗日の女将軍なる名声を得ていた金正淑(キムジョンスク)女史である。

総書記は幼年時代から、格別に複雑多端な環境の中でさまざまの体験をした。

1945年8月15日、祖国解放という歴史的な出来事について、解放なった祖国における民主新朝鮮の国づくりに取り組む勤労人民の労働や生活を目撃し、世の動きを体験しつつ成長していた矢先の1949年9月には、慕い愛していて止まなかった母親と死別する悲哀を味わった。

国の解放後5年にも至らぬとき、アメリカ帝国主義の侵略を撃破する祖国解放戦争（朝鮮戦争1950・6—1953・7）の勃発による試練も体験した。

十代にも充たない身で母親をなくし、引き続いて起きた朝鮮戦争は、幼い総書記にとってはかり知れないほど大きい衝撃的な出来事であったが、他方それは新たな成長への転換の契機でもあった。

白頭山の子

朝鮮の北辺の地に民族の聖山白頭山がそそり立っている。

白頭山の峰は高く領域は広大で、また山容も雄大なので、古い昔から神聖な霊峰としてあがめられてきた。

標高2000メートルを越える険山峻嶺を左右に従えた白頭山は太古の昔から住人のいない無人の境であった。それで人々は「野生人参の採取者すら足を踏み入れようとはしない山」「鳥もあまりのうらさびしさに耐えかねて引っ越してしまう地帯」だと言い合ったものである。

このように人間はもとより鳥どもさえ住みつくのをきらっていた白頭山の太古然とした原始林に「最初の居住者たち」が出現したのは、1930年代の後半頃であった。

抗日武装闘争の指導拠点が白頭山に移されることになって、白頭山地区の小白水(ソベクス)渓谷に丸太小屋からなる密営がつくられ、朝鮮人民革命軍の司令部がここに座を占めた。

1940年代に高い山々に取り囲まれた密林の中、真冬にも凍ることのない小白水の流れをかたわらに控えた密営地に今一つの丸太小屋が建てられたが、ここで抗日革命闘士たちの喜びにあふれる祝福を受けて、金正日総書記が誕生したのであった。

総書記の出生は朝鮮人民革命軍隊員たちを言い知れぬ歓喜にひたらせた。白頭山密営の闘士たちだけでなく、そのことを知らされた東満州、南満州、北満州で戦う朝鮮人民革命軍の諸部隊からはわざわざ祝いの使節たちが派遣され、心こもる物品も届けられた。

白頭山密営から遠くの地に出向いていた金日成主席は、総書記の出生後4カ月目の6月某日密営に帰り、わが子を抱き上げた。

一家の慶びの中でもこんな慶びにまさる慶びはないであろうが、主席の両親も弟、叔父も反日闘争の中で犠牲になり総書記の誕生を祝って慶ぶはずの他の家族たちは近くにいなかった。そういうわけで、総書記は一家親類ならぬ両親の戦友、朝鮮人民革命軍隊員たちに見守られ、愛されながら成長していった。

このように総書記の幼年時代は、白頭山地区の密営で抗日革命闘士たちと共に革命的で戦闘的な、しかも苦難と試練に満ちたパルチザンの生活をじかに体験しながら成長した日々であった。

総書記が生まれ育った千古の白頭密林は軍服を着用した人たちの活動拠点であったので、生まれたばかりの赤子に必要な物品は皆無であった。それ故総書記の乳幼児時代は最初から苦難に満ちていた。

吹雪が猛威を振るい、猛獣が吠える日々が続く、千古の密林の中のパルチザンの兵室がほかならぬ総書記のねぐらであった。

赤子のおしめやむつき、それに衣服も母親が着ていた硝煙にくすんだ軍服を作り直したもの、それに古びた軍用毛布であった。

母親の女戦友たちはそのことを見かねて胸を痛め、自分たちの綿入れの軍服の縫い目をほぐして綿を少しずつ取り出し、各自が大事にしまっておいていた布切れを集めて小さい敷き布団を作った。

その敷き布団を受け取った金正淑女史は、ありがとう、今に祖国の解放がなったら昔語りをしながら暮らそうよ、その時は国の至る所に託児所や幼稚園を立派に建て、生まれた赤ちゃんたちをみな絹の産衣に包んで育てるようにしましょうねと言った。

幼い総書記は、時には渦巻いて吹きすさぶ雪風のたたりでオンドルの火の通しが悪い日などは火の気の失せた部屋で寒さに震えた

り、障子紙を破って吹き込む雪に当たり身体のこごえる思いもした。

それらの日々の出来事があまりにも痛く思い返されていたある抗日革命闘士は解放後外国を訪問した機会に、上質の毛布500枚を買って帰り、金日成主席と金正淑女史に贈呈した。

主席と女史は、彼が白頭山で晴らせなかった無念の思いを今度の機会に晴らそうという一念で求めてきた物だから、その思いを晴らしてやることにしようと相談し、それらの毛布をすべて万景台革命家遺児学院（当時）の院児たちに寄贈した。

幼い総書記は寒さだけでなく、ずいぶんとひもじい思いをした。

抗日武装闘争は敵軍との血みどろの戦いであるばかりか、それと同時に飢えを克服する飢餓との闘争過程でもあった。さまざまの苦難が時々刻々部隊の前に立ちはだかったが、そんな一切の苦難の中でも最も深刻に彼らを苦しめたのは食糧難であった。

戦友たちの強い制止にもかかわらず、金正淑女史は毎日の教練に欠かさず参加した。それで、幼い総書記は適時に母乳を吸うことができず、常時空腹にさいなまれ、眠るべき時にもすやすや眠れない日常であった。

でも、それはさほど大きな苦痛だとは言えなかったであろう。

母親が常時そばにいてくれたら安心して眠れもし、目覚めていても気分がよく、ちょっとばかりおなかがすいても平気でいられるのが幼児の習性であろうが、幼い総書記にはそのような安らぎすら覚えることのできない日々が少なからずあった。母親が重要な任務を受けて司令部を離れ、密営にいない日々もしばしばあったのである。

そんなわけで幼い総書記は普通の幼児よりかなり早く乳離れを余儀なくされて食事をするようになったが、口にするのは軍隊の食べ物だった。

密営の食事は、丸のままのトウモロコシ飯やすりつぶしたジャガイモに草を混ぜて炊いたポムボギ飯(混ぜ飯)が上等の食べ物だった。草粥すらも夏期にしか見られず、山河が深い雪に埋もれた長い冬の季節にはそんな物も切れて、何日も雪を腹に充たして過ごすようなこともまれでなかった。幼い総書記も白頭山密営で過ごしながら取った食事はほかならぬこのようなパルチザンの軍隊飯だった。

人間が草の根の味を忘れたら革命闘争もできなくなるとしてナズナのあえものも喜んで食べ、キュウリの漬け物を入れただけの握り飯やひと碗のトウモロコシ粥も同志たちと分け合って口にしながら現地指導をたゆみなく続けた際の感激的なエピソードのかずかずはいずれも幼時、白頭山密営におけるパルチザン生活の中で身についた高潔な偉人的品性に由来したものである。

金日成主席は常日頃しばしば金正日総書記の白頭山時代に思いを馳せ、彼は十分に食べることも着ることもできずに白頭山の吹雪の音を子守歌のように聞きながら育った、彼はわれわれが戦闘を通して分捕った緑茶にわずかばかりの砂糖を入れた薄い飲み物を口にしていたが、いつも空腹を覚えて小さな指を吸っていたと追憶したものである。

金正日総書記の思想的・精神的成長と情緒の発達上最も主動的、積極的な役割を果たしたのは抗日革命闘士たちだった。彼らが身につけていた気高い情緒は豊かな養分となって幼い総書記の胸に吸収され、彼らの不屈の闘志と気質は、偉丈夫にふさわしい性格の形成に役立った。

苦難に満ちた生活環境が人間の精神的成長を早めるというが、総書記の成長は並はずれて速かった。

近くに人家のない白頭山に生を受けた総書記は、同じ年頃の子

たちとは一度として会ったことがなく、常日頃パルチザン隊員のみを遊び友達として育った。

それで会話も歌も早く習熟し、「オンマ（ママ）」という単語の次からは「銃」「剣」「独立」「革命」などパルチザンたちがよく使う単語を覚え、歌も童謡ならぬ『遊撃隊行進曲』や『インターナショナル』のような革命歌を多く歌ったものである。

総書記は幼いながらもパルチザンたちと困難な生活を共にしながら革命闘争の厳しさを身にしみて実感し、いかなる苦難も笑って克服していく不屈の意志と楽天的気性、革命の戦友たちとは常に苦楽を共にする気高い品性をはぐくんだ。

薄い軍服とパルチザン隊員たちの心こもるつぎはぎの敷き布団を通して、戦友愛の温かい体温を感じ取りながらいかなる困難にもめげない強靭な意志と忍耐力、生活力をはぐくみ、彼らに対する信頼心と深い愛情を覚えた。

抗日革命闘士たちは、人家のない深い山中で丸太小屋やテントの中、あるいは雪中の野外で夜を明かしながら血戦を繰り広げたあの厳しい時代を「白頭山時代」だとか「山で戦っていた時」などと表現していたが、この「白頭山」「山」という言葉は抗日の決戦場を意味している。

このように白頭山密営は金日成主席に深い印象を残し、抗日革命闘士たちの胸中にも消しがたい聖地との印象を刻みつけた由緒ある地である。

ところが、歳月の流れは白頭山密営を人々の記憶から消し去ろうとしていた。

祖国解放の大事が目前に迫ると、これを主動的に迎えるべく金日成主席の立てた作戦的方針に従って司令部を新たな活動地

区に移すことになり、幼い総書記も白頭山密営を去った。

国の解放が達成されると、新祖国の建設につぐ祖国解放戦争、引き続く戦後の復興建設と社会主義建設など多難かつ壮大な偉業に全人民が取り組んでいる中で年月はとどこおることなく流れ、総書記の生家は人々の記憶から次第に薄れていった。

それに密営づくりに関与した隊員たちや密営の地形に明るい隊員たちも戦死し、あるいは老齢で死亡もして、解放後幾十年が経った時点では、密営の位置の見当もつかず、暗中模索していた。

金日成主席は朝鮮革命の陣頭に立ってその指導に忙殺されながらも白頭山密営を見つけ出すべく、猟師出身の抗日革命闘士を何回も白頭山地域に送り込んだ。けれども山には腕利きのその隊員さえも密営の跡を発見することができなかった。こうしてさらに歳月が流れた。

それをもどかしく思っていた主席は、革命の一世が生存しているうちに革命史跡を残らず発掘・考証しないならば、それら貴重な宝が永久に消え去る恐れがあるとし、70歳の老体を押して自ら現地におもむき、日を何日も重ねた末密営の跡を見つけた。さらに1988年には復旧なった現地へ再度おもむき、密営で送った日々を感慨深く振り返った。

以上のように、永遠に存在を消す恐れのあった白頭山密営は奇跡的に発見され、金正日総書記の生まれた丸太小屋も国の解放後40数年にして世に公開された。

白頭山密営の発見は衝撃的な出来事であった。

中でも人一倍驚き、興奮したのは、抗日の老闘士たちであった。

実に半世紀ぶりにいにしえの聖地、白頭山密営を訪れた彼らは、見覚えのある山容や夢にも忘れることのなかった低い屋根の丸太小屋を見つめながら、こんな口惜しい慶事もあるのか、当時この谷に小白水渓谷という地名がついていたなら、われわれの当地訪問がこんなにも遅れるようなことはなかったろうに、と無念の思いで遠い昔の出来事をいつまでも振り返った。とりわけ彼らは、総書記の生家にいつまでも心を引きつけられて長いこと立ちつくしていた。

部屋の座机の上には木製の拳銃や双眼鏡が置かれ、部屋の片隅にはつぎはぎの敷き布団、壁には石油ランプが掛かっているなどなどと、総書記の幼いころの体臭と息づかいがそのままに感じられる遺物に見入り、総書記が力強い呱々の声を上げながらこの世に生を受けたその日が昨日のことのように思い起こされて、興奮を抑えることができなかった。

朝鮮人民は、白頭山密営の生家の背後にそそり立つ将帥峰（チャンス）を、総書記が誕生した地のゆかりある山だとして「正日峰」と呼んでいる。

特別な因縁で結ばれた白頭山であるがゆえに、金正日総書記はしばしば当地を訪れている。

今日も朝鮮人民は、総書記の性格と気質、風格などのすべてが白頭山に似ているとして、総書記を「白頭山の子」と呼んでいる。

美しい人情味

金正日総書記は、抗日の血戦場の中で発揮された、生死を共にして戦う抗日革命闘士たちの気高い同志愛と美しい人情味を毎日のように体験しながら成長し、そのような中で人々を心から思いやり、愛する心情だけでなく、彼らのためにすべてを尽くそうと

する気持ちも早くから身につけるようになった。

国の解放後の幼年時代に発現した総書記の熱い他愛の精神は、同じ歳の幼少年には見られないほど非常な高みに達していた。

幼い総書記に会った人は誰であれ、おのずとその人となりに心が引かれてほめそやしたものである。

幼稚園の工作時間に、おもちゃの戦車を作ることになった際、熱心に捏ねてきた粘土をそれがなくてもじもじしている友だちに分けてやり、自分は残ったものでちっぽけなボタンを作ってがまんしたという話、兵隊ごっこをすることになった時、体が弱く病気がちで遊びに加われず、独りみんなから離れてしょんぼりしている子を呼んで自分の「伝令」に任じ、その「任務」まで果たそうとそれとなく気を使ったという話などなど、その深い思いやりについてのエピソードは数えるにいとまがないほど多い。

その中には次のような話もある。

1948年8月のある日、幼い総書記は母親に手を取られてある村を訪れた。

抗日の女将軍金正淑女史の来訪を知った村人たちはこぞって村道に駆け出して歓迎した。

それら村人の中に5、6歳ほどの女の子がいたが、その子は足の指がはみ出すほど先が口を開けている古いゴム靴を履いていた。

そのことに気づいたある幹部の妻が、まあ、この子ったらゴムのサンダルを履いているわよ、と半ばからかい気味に言った。

その子はサンダルがなんのことやら分からないながらも、彼女の口ぶりから自分をなぶっているものと気づき、うなだれた。

金正淑女史は彼女に向き直り、なんということを言っているのです、今わが国の人たちはほとんどが苦しい生活を余儀なくされ、履物さえろくに手に入れられないほどなのはその人たちの罪じゃありません、それは日本植民地支配者が残した貧困がまだぬぐい去られていないせいなのですよと叱責し、朝鮮人民がみな豊かに暮らせる日はきっと来ますと言った。

この時、幹部の妻を苦々しげに見つめていた幼い総書記は、ついと乗用車に駆け戻り、座席に置いてあった自分の新しい履物を持ってきた。

「ほら、これを履いてみなよ。これはね、ぼくの物だけど、その足にはちゃんと合うだろう。今に父なる将軍がわが国の子供たちみんなにもっとよい靴を履かせて下さるよ」

こう言って女の子の古いゴム靴を脱がせて、新しい履物を履かせた。

その履物は父親がわが子の靴があまりにも古びているとして、出発に先立って手に入れてきた物だったが、それを履いてみもせず車の座席に置いたまま来たのを惜し気もなく女の子に与えたのである。

その光景を見ていた人たちはみな感嘆して止まなかった。彼らは口々に、確かに金日成将軍のお子さんはただの子じゃない、その美しい気持ちには天も感嘆して止まないだろうと言い合った。

国の解放後のある年の秋、幼稚園で運動会が催された時のこと。

ここで園児や母親たちの大きな関心の的となった競技の一つは三輪車競走であった。

これには幼い総書記も出場し、見物の母親たちや先生、園児たちのやんやの歓声の中でみんなの先頭を切って走った。

ところが、決勝線の間近であとに続いていた子の三輪車がどうかしたはずみで横倒れになった。あっという悲鳴に驚いて振り返った

総書記は、車を止めてそこへ駆け寄り、倒れた三輪車を起こしすばやくその子を乗せてから、また自分の三輪車を走らせた。けれども、その間に他の三輪車に出し抜かれて、惜しくも2等に甘んじるほかなかった。

見物の母親や先生たちはそのことでとても残念がったが、一人金正淑女史だけが大喜びし、拍手さえ送った。

わが子の感心な行いを人の前でほめるようなことは一度としてなかったが、この時だけはわが子を抱き上げて、倒れた友だちを助けたんだから1等をするよりも素晴らしいことだったよ、本当に立派なことをしたわね、とほめちぎった。

幼い時から総書記はこのように友だちは誰であれとても愛し、彼らのためなら何事をも惜しまなかった。

友だちだけではなかった。

広く人々を愛するのは総書記の天性であった。

人情に厚く、その誰であれ会えば分け隔てなく丁重に挨拶する品性、とても子供とは思えない重みのある端正な身のこなし、これが幼年時代から身につけていた、人々を感動させ心を惹きつける総書記の風格であった。

人々の誰彼なしにこのような厚い人情味をもって遇するので、その家宅を訪れて幼い総書記に会った人たちの誰もが、おのずと心を惹きつけられては称賛して止まなかったのである。

世界の国々を訪れてさまざまの有名人に会ったという南朝鮮政界の大物であった呂運亨（リョウンヒョン）も、朝鮮の歴史と文化、伝統、風習、礼節に精通していたという洪命熹（ホンミョンヒ）も例外ではなかった。

抗日連軍時代に金日成主席と金正淑女史と深い親交を結んでいた東北抗日連軍指揮官であった周保中とその夫人が幼い娘を伴って、朝鮮の解放後平壌（ピョンヤン）を訪れ、金日成主席の邸宅でしばらく過ごしたことがあった。

幼い総書記がその母子をいかに親切に遇したのか、夫人は、金日成将軍のお子さんは思いやりが深く、心が広くてこせこせしたところがなく、人情にあついとたたえて止まなかった。

総書記は幼年時代、友だちみんなを一つに結びつけ、性質のすなおでない子も心から教えさとして正しい道に導き、友だちばかりでなく、先生たちですら考え及ばなかった斬新な方法で締りのないクラスの雰囲気を瞬時に一新する手際を発揮もした。

その幼稚園時代にはこんなこともあった。

ここでは園児たちが靴箱に入れた履物を履き違えて、すったもんだの騒ぎを起こす出来事がしばしば起きていた。これを見かねた総書記は、どうしたら字の読めない子たちが靴箱から自分の履物をたやすく見つけることができるだろうかといろいろ考えた末、翌日、色紙で飛行機、戦車、リンゴなどなどを切り抜き、それらを靴箱に貼りつけた。

幼稚園に出勤してそれを見て訳を知った先生はいたく感心し、子供たちにそれぞれの絵と靴箱の位置を決めてやった。

自分の履物もまともに見分けることのできない子たちと同じ歳の幼い総書記が園児たちの童心にきちんと合わせて見事に難題を解いたこのエピソードは、幼くしてあつい人情味を身につけ、ひいては人々の心理をよく把握し、それに応じた方法論を引き出して彼らを正しく導くその秀でた才能をよく見せる一例であった。

あの祖国解放戦争の厳しい環境の中でもそのあつい人情味にはいささかの陰りも見せなかった。

激戦が続く中、ある疎開地で過ごしていた時、片足に義足を付

け、松葉杖を突いて歩く18歳の娘がこの疎開地にやって来た。

前線の援護に献身していた彼女は敵機の爆撃で片足を失い、治療の末義足を付けて姉を尋ねてきたのであった。

彼女は不具のわが身を人に見られるのがつらく、それに他人の同情の言葉を聞くのも心苦しくて、戸外に出ることがほとんどなかった。

少女時代から作文に興味を覚えていた彼女は悲しくて泣きたくなると、ノートを取り出して詩作をし、人知れず涙を流していた。

そんな彼女を不憫に思った総書記は、時々同級生たちを呼び集め、彼女を招いて娯楽会を行ったり、笑い話をしたりして、彼女を喜ばせ、それとなく慰めた。

ある日曜日、総書記は、ちょっと戸外の風に当たってみませんかと言って、彼女を野外へさそった。

初夏のことで、道を行き来する人が多く、川で洗濯する女たちや水遊びをする子たちもいた。

人々の目が自分の義足に向けられていることに気づいた娘は、たまりかねてもう家へ帰ると言った。

その気持ちを察した総書記は、彼女の手を取って言った。

「アメリカ軍と戦って傷ついたのがどうして恥ずかしいことなのです。ちっとも恥ずかしいことじゃありませんよ。さあ、ぼくと一緒に胸を張って歩きましょうよ」

そんなことがあった日から総書記はしょっちゅう彼女を戸外へ連れ出して、歩行練習をさせた。こうして彼女の歩みは日に日に容易になり、日ならずして松葉杖は1本の杖にとって代えられ、それもしばらく後からは捨てられて、かなり長い道も別して苦労せず歩けるようになった。

こうして健康を回復した娘は大学に通うまでになり、その半年後総書記は彼女からの手紙を受け取った。

封を切って手紙を抜き出そうとした時、なんと封筒の中から薄紅色のツツジの花びらが幾つもはらはらとこぼれ落ちた。

手紙には、大学の勉強にずっと励んでいるということと、疎開先で楽しい日々を送れるようはからって下さったことへのお礼の気持ちをこめて、大学の寮で育てたツツジの花びらに添えて自作詩1編をお送りすることにしましたという内容が記されてあった。

詩の題は『ツツジ』だった。

彼女が封筒の中に入れて送ったツツジの花びらは、自分を温かくいたわって下さり、希望と未来への確信を抱かせて下さった総書記への感謝をこめて同封したものだった。

この戦いに傷ついた女性に対する総書記の思いやりはその一事にとどまるものではなかった。

それから20年近くの歳月が流れたある日、彼女の夫に会った総書記は、あなたの夫人が負傷し、義足の体で松葉杖を頼りにお姉さんを尋ねて来た当時のことがありありと記憶に残っている、夫人が作った『ツツジ』という詩は今も忘れず覚えているとして、静かにその詩をそらんじた。

その後、彼女が夫と共にある外国の駐在朝鮮大使館へ出掛けることになった時、総書記は戦時の日々にあった思い出を新たにして、ツツジの花を象徴する薄紅色のスカーフと服地を贈った。

現実の中で体験した人民の力

金正日総書記は、国の解放後新民主朝鮮の建設に邁進している朝鮮人民の巨大な力と祖国の沸き立つ現実を目撃しながら思想的・精神的に大きく成長していった。

解放なった祖国に帰った幼い総書記が何にも増して深い感動を覚えたのは、常に人民の中に入り、人民の力を奮い起こして新民主朝鮮を立ち上げていく両親の姿であった。

金日成主席は祖国に凱旋したその日から、抗日革命闘争のさなかに掲げた「人民の中に入れ！」というスローガンを座右の銘として、人々の働く工場や農村、学校を巡り、新しい国づくりに向けた現地指導を止むことなく続けていたし、金正淑女史もしばしば各階層の人たちの中に入り、彼らと苦楽を分かち合っていた。

主席は夢にも忘れたことのない故郷万景台への道をも後に回して真っ先に降仙(カンソン)製鋼所を訪れ、労働者たちを新しい祖国の建設に邁進するよう力強く呼びかけた。

金正淑女史も祖国に帰ると、休むいとまもなく工場や教育・文化機関を巡り歩いて、人々が金日成主席の周りに固く結集して新祖国の建設路線を貫くよう励ました。

当時、金日成主席を民族の指導者として歓迎した朝鮮人民の建国熱は活火山のようにたぎり立っていた。

金正日総書記が両親に伴われて見て回った農村や工場では、いずこを問わず、各階層の人たちがこぞって主席の建国思想を支持して奮闘していた。

人民の愛国心を大きく発揮させるために打ち出された建国思想総動員運動の炎が燃えさかる中、鉄道部門の労働者たちは鉄道輸送の正常化と輸送能力の向上を計るべく創意に富んだ愛国運動の烽火を高々と上げた。国家に30俵の愛国米を献納した農民金斉元(キムジェウォン)の愛国行為にならって、全国の農村では大衆的な愛国米献納運動が展開された。

幼い総書記が新しい国づくりに立ち上がった朝鮮人民の力がいかに偉大であるかを知ったのは、普通(ポトン)江の改修工事に幼いながらも参加した時であった。

国の解放後初めて行われる大自然の改造工事であった普通江改修工事は、朝鮮人民の無尽の力を誇示した重要な先駆的工事であった。

国が解放される以前の普通江は、雨期を迎えると、ちょっと降り続いた雨によっても氾濫して住民の生命が失われ、家屋が流され、広い田畑が無残に荒らされたものである。

日本の支配者は10年もの間、延べ数百万の朝鮮人民を駆り出して堤防工事を行ったが、おびただしい死傷者を出しただけで工事を投げ出してしまった。

1946年、自分たちの幸福は自らの手でもたらされるべきだと呼び掛けた金日成主席のアピールに呼応して、平壌市民は総決起した。

幼い総書記も母親の手に引かれて工事場に出掛け、老人たちの仕事を手助けし、雨が降り強風が吹きすさぶ中でもケングァリ（鉦）を鳴らし、セナプ（笛）を吹いて気勢を上げる楽隊に力づけられながら仕事にいそしむ人々と共にいた。

主席の鍬入れによって始まった歴史的な普通江改修工事は、人民の愛国心によって55日という短期間で完遂した。

幼い総書記は人民が見事にやり遂げたこの奇跡的な成果をわが

目で確認し、主席の周りに一致団結した人民の力は無尽であることをいたく思い知った。

金正日総書記は、なにか一つを習うと、そこに疑問の余地がないと思える事実や現象についても、新たな事理や意味を見いだして人々を感嘆させた。

幼稚園で数についての勉強をしていた時のことであった。

先生はまず、「1足す1」について教えたが、ここではリンゴ、お菓子、鉛筆などを例にして熱心に説明した。

すると総書記が不意に立ち上がり、**「先生、一つに一つを足しても一つになるものがあります」**と言った。

先生はまさかと思って、どんな時にそうなるのですかと聞いた。

総書記は、粘土の工作をする時に自分が丸めた粘土に妹が丸めた粘土をくっつけたら一つの玉になったし、花に水をやる時も水の玉が合わさるとやっぱり一つの水玉になりましたと答えた。

先生はなんと言ったらよいかとまどった末、今日は一つに一つを足したら二つになる例について話しましたと言い逃れをした。

翌朝、幼稚園に出席した総書記は、先生に昨日の晩寝床でじっと考えたことを話した。

粘土の玉と粘土の玉をくっつけたり、水玉と水玉を合わせた時は一つと一つを足してもやはり一つになるけれども、そんな時の一つはただの一つではありませんと言ってこう続けた。

「一つに一つが合わさって一つになる時はただの一つだけになるのではなくてもっと大きな一つになります。そしてそれらが幾つも合わさって一つになるとすごく大きな一つになります」

続けて、父なる金日成将軍に従う朝鮮人民の心も合わさると一つになるとして、**「一つの心で金日成将軍に従う朝鮮人民の力は世界で一番強いです」**とつけ足した。

前夜幼い総書記が持ち出した思いもよらない問題について自分なりにあれこれと考えてみたが、夜明けまでもなんらはっきりとした解答を出せないまま出勤した先生は、驚かざるを得なかった。

幼稚園に通う幼い歳で、一つに一つを足すと二つになるだけでなく、また一つになる場合もあり、さらに幾つも合わさって一つになる場合は単なる一つではなく、ずっと大きな一つになると思いつき、そのことを確信して教員の自分にはっきりと説明したのである。

先生はその時の驚きと興奮を抑え切れず、自分の手記に「1＋1＝1」、これは単なる数式ではなく、深奥な哲学的命題であると書き残した。

この出来事があってからずっと後になって、朝鮮の著名な社会科学者たちは、一つに一つを足しても一つになる場合があるという命題は、金正日総書記が打ち出した、朝鮮労働党の一心団結の理念的原理であると口を揃えて語った。

金正日総書記は苛烈を極めた祖国解放戦争の日々にも、戦争の勝利に向けて決起した人民の力をたびたび目撃した。

戦争たけなわの1952年6月のある日、父親の下を離れて暮らしていた総書記が父親と再会した時、ぼくもこれからは最高司令部で生活したいと思います、お父さんが行かれる所ならどこへでも一緒に行きたいですと言った。

主席は大きくうなずいて、こう言った。

「うむ、よく考えた。最高司令部へ来て、お父さんと一緒に暮らそう。そうして朝鮮人民と人民軍の英雄的な戦いぶりをもっとはっきり見、体験したら、アメリカが火をつけたこの戦争のため

になめる人民の痛みを切実に実感し、さらに祖国と人民についていっそうはっきり知ることができるだろう」

こうしてそれ以来総書記は父親と一緒に敵の空爆や彼我の砲火の飛び交う戦地で過ごしながら、実に貴重な事柄をさまざまに体験した。

総書記が鴨緑江（アムロク）岸の国境都市新義州（シンイジュ）で金日成主席に会ったその日、新義州の上空では人民軍の戦闘機と米軍機の間で空中戦が繰り広げられた。

空中戦を見守る主席と総書記の間に次のような会話が交わされた。

「どうだ。わが軍の戦闘機は何機で、米軍の戦闘機は何機かな」

「わが軍の方は2機で、米軍の方は20機です。だから2対20です」

「うむ。じゃあ、わが方は勝てるだろうかな」

「はい、きっと勝つと思います」

「そう、勝つとも。勝たずにはおかんだろう」

空中戦を見つめながら総書記は、敵機が墜落するたびに歓声を上げた。

この日の空中戦を見て総書記は、朝鮮人民を屈服させる者はどこにもない、わが軍は必ずやアメリカ侵略軍を撃破し、戦いに勝利すると確信した。

この確信は、父親に従って敵機の猛爆撃が加えられているさまざまの地方を巡っていた際にも、また、最高司令部の作戦室で困難な戦争局面の打開策を講じる主席の姿に見入る中でもいよいよ強まった。

ある農村を通っていた時のこと。

農家は無残に破壊され、そこに残っているのは崩れた壁の跡だけという有様だったが、川向こうの田畑では擬装網をかけた農婦

たちが牛を操って中耕をしていた。丘の上には、空の監視を行っている女性もいた。

車窓を通してそんな光景を眺めていた主席がわが子に聞いた。

「お前はあの人たちを見て、どう思っているのだ」

「朝鮮人民のように敵を憎み、祖国を愛する人民はほかにないようです」

「その通りだ。あれこそまさに戦うわが人民の姿なのだ。あのような人民を屈服させる力はこの世にはないのだ」

主席は、お前も見たように、今度寄ってみた楽元（ラクウォン）機械製作所もなんと無残に破壊されていたことか、それで、その破壊ぶりに胸を痛めていると、一人の女性党員から工場の復興建設は心配するに及びませんと言われたとして、こう続けた。

「その女性の言葉は生涯忘れられそうにない。彼女から実に大きな力をさずかった。

われわれにはあんなにも強く、すぐれた人民がいるのだから、アメリカと戦ってきっと勝つことができるのだよ」

幼い総書記にとってじかに見聞きするすべてが、力と勇気をより強く抱かせてくれるまたとない源泉であった。

父親と共に歩む戦火の道は、その一歩一歩が危険極まりない道ではあったが、幼い総書記はその道程で不抜の人民の力を見、戦争の勝利を確信した。

それらの日々から20数年の歳月が流れた年のある日、総書記は当時を振り返り、次のように述懐している。

「あの時わたしは戦火のちまたの中で、人が数十年をかけても感得しがたい最も貴重なものを体得することができました。祖国解放戦争は、わたしの生活において忘れることのできない歴史的な時期でした」

分け隔てのない生活

金正日総書記は幼少年の頃から一度として自分を特別な存在だと考えたことはなく、常に控え目なありふれた生活をしていた。

これには出生と同時に抗日の銃砲声を子守歌として聞き、パルチザン隊員たちに囲まれて暮らしながら彼らの高尚な内面世界の影響を受けたことによるものであろうが、とりわけ常にわが子の成長に格別の注意を怠らなかった母親金正淑女史の厳しいしつけが大きく作用したと言ってよいであろう。

女史はいつもおなかを空かしているわが子にトウモロコシ粥を与えるたびに胸を痛めては、国が解放されたらその時は、今の生活を昔語りにしながら暮らそうねと慰め、解放後は、破れた服や靴下をつぎはぎしては、全国の子供たちがみんな新しい服を着、新しい靴下を履くようになったらお前も新しい服を着、新しい靴下を履くことにしようと言い聞かせたものである。

1948年5月のある日、幼稚園の園児たちが翌日遠足に出掛けることになり、先生は、みんなお弁当をおいしく作ってもらってくるのよと言った。

ところが総書記は帰宅して両親にはなんとも言わずに夜を過ごし、翌朝、わが家でしばらく過ごしていた親戚の女性に、今日遠足に行くから弁当をこしらえてくれるようにと頼んだ。

その頃、家庭では雑穀飯を常食していた。人民がまだ白米の御飯を食べていないのに、自分たちだけが米飯を食べるのはよくないとして、主席は雑穀飯を炊くようはからっていたのだった。

彼女が遠足だと聞いて、別に取っておいてあった白米で御飯を炊こうとした。ところが女史が彼女を押しとどめ、雑穀飯を弁当に入れるようにと言った。

彼女は顔を曇らせて、金日成将軍の息子が粟飯の弁当を持っていったら、どんなに恥ずかしい思いをするだろうかと言って気をもんだ。

すると総書記がひとこと言った。

「ぼく、ちっとも恥ずかしくありませんよ。みんなが粟ご飯を食べる時にぼく一人白米のご飯を食べるなんて……。そうでしょう、お母さん」

女史はこっくりうなずいた。

幼い総書記が嫌うのはこのようなことだけではなかった。幼稚園で勉強する時も、友だちと遊ぶ時も、また外出する時も、金日成将軍の子息だからとして他人から少しでも特別扱いされるようなことを何よりも嫌った。

幼稚園には、党と国家の高位幹部の子女がかなりいた。その子らの中には、まれとはいえ親の車に乗って幼稚園に来るようなこともあった。

けれども総書記には一度もそんなことがなかった。

ある雨の日、総書記が雨に打たれながら幼稚園に向かったことを知った乗用車の運転手が車を走らせて来て、乗るようにと言った。

ところが総書記は、いや、歩いて行きます、お母さんも大して遠くない所へはいつも歩いて行くじゃありませんか、と言って、そのまま歩いて行った。

この朝、車に乗ってやって来た園児やその親たちも、幼稚園の先生も、雨に濡れながら来た総書記を見て、大きなショックを受けた。

これだけではない。

総書記は良心にもとるようなことは、それがどんなにささいな事であっても決して容認するようなことがなかったし、友だちにもそのように生きるよう教えた。

1946年のある夏の日、車賃を払えぬまま無理に市電に乗ってきた女生徒たちが、再びその電車に乗って車掌にわび、車賃を払うようにしむけた話、運動場でまりを蹴って遊んでいた園児たちが、誤って窓ガラスを割りながらも、叱られるのが恐くて黙っていた時、叱られることよりもっと恐ろしいことは良心にそむくことだとさとし、先生に正直に話すようにした話などは、総書記の幼年時代の人となりの一端を如実に見せるエピソードである。

祖国解放後の全人民的な大自然改造工事であった普通江改修工事が進められていた時には、こんな事もあった。

ある日、母親がわが子に向かって、普通江の岸辺で暮らしている人たちが毎年雨期になると家々が水害に遭って苦労していることをとても心配して、お父さんが改修工事をするようにされたんだけど、わたしたちも工事場へ行って働くことにしようと言った。

こうして総書記は母親に手を取られて工事場へ行き、仕事に励む人たちを手助けした。

年寄りたちがショベルやつるはしの柄を手入れすると、そのつどそれらを工事現場へ持って行きもし、時には鍛冶場で汗をかきながらふいごを引いたりもした。

幼い子のあまりにも熱心な働きぶりに、老人たちは目を見張った。

その働く姿に感心して注意深く見ていた一人の老人が、この子は雨期に水害に遭って苦労している土城廊(トソンラン)の住民の子に違いないと思い、何かと話しかけ、お父さんはどこで働いているのかと聞いた。

自分は金日成将軍の子ですという答えを聞いてびっくりした老

人は、その言葉がどうしても本当だと思えず、その手を引いて作業場で働いている金正淑女史の所へ行った。

女史はわが子が見知らぬ老人に手を引かれて来たのを見て、その訳を聞き、老人に自分たちのことを打ち明けた。

二度びっくりした老人は、目をしばたたいて、将軍のご夫人がお子さんまで連れて来られて、こんなきつい仕事を汗を流しながらなさっているなどとは、まったく……、わたくしどもはただ驚くばかりですと言った。

二人の話に聞き耳を立てていた周りの人たちも、ただただ感嘆して止まなかった。

総書記は翌日もまたその次の日も、ずっと休むことなく工事場へ出掛けて、働く人たちの世話を焼いた。

母親と一緒に普通江改修工事場で送った日々は、後日、総書記が人民の中に入り、彼らと苦楽を共にする人民の指導者に成長するにふさわしい貴重な風格を身につける前提をなした日々であった。

総書記は、国の解放後歴史的な土地改革法令が発布されると、土地の分与が進められている農村へ出掛けて見もし、ある年には母親と一緒に美林(ミリム)が原へ行き田植えを手助けしたこともあった。その時農民たちは、苗束を両手に持ち、汗みずくになって畔を踏んで走る総書記の手を引いて木陰へ連れて行こうとした。すると総書記は、みなさんが休む時に一緒に休みますと言って田植えの手助けをそのまま続けた。

総書記の人民的風格をしのばせる幼年時代のエピソードがある。

1948年のメーデーの日、労働者の祝日を祝って平壌市の勤労者たちが集う大衆集会が開かれた。

幹部壇の一端には母親に手を取られた幼い総書記も立ってい

た。ところが集会の半ば頃、思いもよらずにわか雨が降り出した。
　すると一人の随員が金日成主席に傘をさそうとした。ところが主席は、市民たちが雨に打たれているのに、どうしてわたし一人傘をさして立っていられるのだ、と言って、随員を押しやった。
　その時、今度は他の随員が幼い総書記の頭上に傘をさした。すると総書記は、お父さんが雨に濡れており、またあの下にいる労働者のおじさんや農民のおじさんたちもみな雨に当たっているのですから、ぼくも雨に当たります、と言って、傘の外へ一歩踏み出した。今一人の随員が雨着を着せかけたが、それもその人に返した。
　雨は次第に激しくなっていったが、幼い総書記は唇を噛みしめて集会が終わるまでずっと立ち続け、全身ずぶ濡れになった。
　この日、幹部壇には、平壌で開かれた歴史的な南北連席会議に参加した南朝鮮政界の右翼の大物金九（キムグ）も立っていたが、この光景を目撃して、6、7歳ばかりにしかならないお子さんが人民大衆といささかの間隔もおかずにずっと雨に当たっていると感嘆して止まなかった。
　祖国解放戦争当時、総書記の担任教師が他地へ転任することになった時、総書記の教育上必ず考慮すべき12項目の注意書きを後任の担任に残したが、そこには総書記の抜群の気質と品性の一端を見せる内容が集約されていた。
　そのうちの1項目に、金正日君は特典を望まないばかりでなく、そんなことを非常にいやがっているから、この点に留意し、とりわけ教員が自分に対するしつけを強めることを望んでいるから、他の児童と全く同じように指導し、きびしく待遇するよう強調している。
　この項目は、金正日総書記の幼少年時代の品性を総体的に評価したものだと言えよう。

2

時代の激流の中で

1953年7月27日、3年間にわたる苛烈極まる祖国解放戦争は、朝鮮人民の勝利によって幕を閉じた。

銃後の万景台革命学院で生活していた金正日総書記は、その年の9月から三石（サムソク）人民学校（小学校）で、翌年2月から平壌第4人民学校、9月からは平壌第1中学校で勉強した。

その間、総書記は金日成主席に伴われて国内の諸地方を見て歩き、戦後の復興建設に取り組んでいる祖国の沸き立つ現実を目撃し、首都の建設に熱心に参加もした。

他方、学習では主体性を確立することで朝鮮革命の実践に役立つ生きた知識を習得することに努めた。

1960年9月、金日成総合大学に入学した総書記は、チュチェの革命偉業を継承し完成する遠大な構想を抱いて、学習と科学の研究に打ち込み、社会実践活動を積極的に行いながら多面的な知識を身につけ、思想的・理論的資質を非常な高みへ磨いていった。

1964年3月、総書記は卒業証書と全科目最優等の成績を受け、表彰状を授与された。

戦後、灰の山を掃き清めて立ち上がり、チョンリマ（千里馬）の大進軍をもって世人を驚嘆させる飛躍を遂げた大高揚期に金正日総書記が送った学窓時代は、永遠に世人の記憶に残るであろう意義の深い日々であった。

なみの学生

金正日総書記は、戦後も常に従来と変わりなくどこにでも見られるなみの学生として生活し、ひたすら学業に励んだ。

総書記は最初、しばらく三石人民学校に通い、翌1954年2月、平壌第4人民学校に転学した。

金日成主席は初の登校日に、わが子の身なりに目をこらし、新しい学校へ行っても先生のお言葉をよく守り、友だちと気さくに付き合い、熱心に勉強するんだぞと注意した。

登校して教室に入り、まず級友たちに挨拶をする総書記に子供たちの視線が集中した。

その前の日、担任と校長先生が教室へやって来て、机の位置を決めて代わる代わる腰掛けてみて、何か小声で話しているのを見て、子供たちは、どこか幹部の子が転学してくるらしいと思い、一体どんな子だろうかと考えていた。

ところが待ち構えていた子供たちは、転学生の様子を見てきょとんとした。何よりもその身なりがどうしても幹部の子のそれではなかった。ただの粗末な木綿織の服に黒いズック、色のあせた風呂敷の本包み、それにその子が自分は三石人民学校から移って来たという挨拶の言葉を聞いて、みんなは、なあんだ、田舎の子じゃないかと思った。

当時、三石は郊外の平安南道（ピョンアンナムド）勝湖（スンホ）郡に属していた。

それで緊張のほぐれた子供たちは、総書記をなれなれしく取り囲んで話しかけ、一人の子は腕をまくり上げて腕ずもうをしよう

とまで言い出した。
　その時、始業の鐘が鳴ったので、総書記は、腕ずもうは後でしようと言って自席に座り直した。
　新しい同級生との出会いはこのようなものだった。
　放課後、総書記を先に送り出した担任は子供たちに座るようにと言って、転学生は金日成元帥のお子さんだから仲良くするようにと話した。子供たちは目を丸くした。どうにも解せなかった。
　転学生は次の日もその次の日も相変わらずその身なり、その草色の風呂敷包みであり、靴下もよく見ると縫い直した古い物だったし、鉛筆やノートも自分たちのものと全く同じ粗末なものだった。
　ある日、同じ机に並んで座っている子が、どうにも疑問が解けず、なんでランドセルを使わず、学用品を風呂敷に包んで来るのかと尋ねた。
　総書記はほほえんで答えた。
　「たとえランドセルがあったとしても、そんな物は使えないのさ。だって君たちみんながそうなのにぼく一人がランドセルを背負って歩いたら、この気持ちが収まるだろうか。そんなことをするより風呂敷包みを持って歩いた方がずっといいよ。
　やがてわが国にかばん工場がたくさん建てられて、子供たちみんなにランドセルが行き渡るようになったら、ぼくもランドセルを背負って歩くよ」
　この思いもよらない返答に、その子は胸が一杯になった。
　総書記は常に、質素を旨としているだけではなかった。当時は冬。教室に石炭ストーブを置いて暖を取っていたが、ストーブの手入れは担任教員がしていた。

　見かねた総書記はみんなにこう持ちかけた。今先生は毎日一人でストーブの世話を焼いている、その苦労を黙って見ていてよいだろうか、ぼくたちが当番を決めて、ストーブの火を見ようじゃないか、と。こうして毎日、2人ずつ当番に当たり、ストーブの管理をするようになった。
　総書記に当番が回ってきた日、朝早く起き出して庭でたきぎを割り始めた。この時、朝の散歩に出て来た金日成主席に、自分たちが教室のストーブを見ることにしているが、昨日の当番が火を消してしまい、今日は自分が当番なので早く登校してストーブに火をつけなければならないと言った。
　朝食後、主席はたきぎを束ねてくくり、わが子に背負わせて言った。
　「重くないかい」
　「いいえ、重くありません」
　「ちょっと重かろうが、背負って行くのだ。お前も今は困難な時期だということを知らないわけじゃなかろう」
　「はい」
　総書記はたきぎを肩にして学校へ向かった。
　今一人の当番の子が総書記の手助けをしなければとして、それなりに急いで登校した時は、なんと、ストーブの火はすでに赤々と燃えており、教室の掃除も済んでいた。
　戦後のある日、こんなこともあった。
　総書記は幼い妹と2人して、穴の開いた靴下を縫っていた。
　夜遅く帰宅した主席が、わが子たちが靴下の両方をそれぞれ手にして縫っているのを見て、「なぜ副官にお金をもらって新しい靴下を買わず、すり切れた靴下を直しているのだ」と聞いた。

すると総書記は、わが国の人たちは破れた靴下を縫って履いているのに、ぼくがどうして新しい靴下を買って履けましょうか、人々がみんな新しい靴下をたやすく買えるようになったら、ぼくも新しい靴下を買って履きますと答えた。

主席が、そんならわが国にゆとりができるまで靴下をずっと直して履くつもりかとまた聞いた。

「朝鮮人の誰もがみんなしていることですから、ぼくだってそうできないわけはありません。実際針仕事もしてみたら別にむずかしいことじゃありません」

こんな返答を聞いて主席は、お前たちがこの首相の子でなかったら大きく表彰したいよ、うむ、そうだとも、実に立派だ、と言って、2人を頼もしげに見やった。

後日総書記は、わたしの両親はいつもつつましやかな生活を旨とし、わたしにも常日頃そのように生きるよう教えさとしてくれた、それでわたしは幼い頃から見栄えのよい履物や衣服というものを知らずに暮らすことが習慣になった、他の人たちは上質の靴や衣服をしょっちゅう替えて暮らしていても、自分は1足を履いても何年も続けて履き、服も1着だけを多年間着続けた、1着だけ長く着ていると、ズボンの臀部がすり切れもした、外出した際そこが破けると、持っていたかばんでその部位を隠して帰ったようなこともあったと述懐している。

金正日総書記は小学生当時ばかりでなく、中学時代も大学に入ってからも変わりなく質朴な生活を続けた。身なりばかりでなく、生活態度も自分を特別な人間だとは見なさず、常に謙虚に生きることを旨とした。

金日成総合大学在学中の1961年の春、平壌紡織機械製作所で生

産実習を行っていた時も同様であった。

「労働安全」という標識を付けた作業服を着、弁当包みを手にして工場に出勤する姿や身なりは、普通の労働者と違ったところが何もなかった。

朝早く出勤すると、一人で作業場の内外をきれいに掃き清めてから実習を始め、いったん仕事に取り掛かると脇目も振らずに旋盤を回した。

昼休みには労働者たちの中に混じって、バレーボールその他のスポーツに興じるのを常とした。退勤時間になると、労働者たちで混み合うバスに乗って帰宅した。

そんなわけで、同じ作業場で働く労働者たちも、ずっとこの実習生がどういう身分の人かということを知らぬまま、それぞれ思い思いに「ざっくばらんな学生」「骨身を惜しまず作業に熱中する実習生」「有り難い学生」などと評した。そして、総書記に非常な親しみを覚えて、心の思いも忌憚なく打ち明けもした。

このように実習中、作業班に溶け込み、労働者たちといささかの間隔も置かずに働き、生活したので、さまざまなことを体験し、労働者たちの熱心な働きぶりと労苦、生活の細部に至るまで熟知するようになった。

この生産実習における体験は、後日、朝鮮労働党と人民を指導する上で貴重な基をなした。

金正日総書記が大学在学中、軍事野営に参加した日々に見せた気高い人民的素行も、人々の間で感動的に語り伝えられている。

総書記は1962年8月中旬に始まった軍事野営に参加した。当地は現在の平壌市龍城（リョンソン）区域御恩（オウン）洞であった。

当時は付近に人家が少なく、生活条件もかんばしくなかった。
そんなわけで、政治部の幹部は総書記に今回の軍事野営では政治部に属して活動全般の指導に当たってくれるようにと進言した。
すると総書記は、今回の野営は軍隊生活を体験するまたとない機会だから、自分は小隊の学友たちと一緒に生活します、今から自分は小隊と分隊に属する隊員ですとして、こう続けた。

「実はぼくの兵士生活は白頭山で始まったと言えます。

ぼくが生まれてから最初に体に付けたのは母の軍服だったし、初めて手に持ったのも母の拳銃でした。

当時ぼくは遊撃隊員たちと同じように飢え、同じように凍え、甘い眠りと暖かい焚き火の貴さも強く覚えながら成長しました。

けれども、ぼくはまだ兵士たちやその生活についてよく知っていると思ってはいません。

今度ぼくは学友たちと共に日課生活にも参加し、険しい山岳にも登り降りし、炊事兵になり包丁を取って料理も作りながら、兵士生活についてよりよく知り、体験したいと思っています」

翌朝、野営所では、訓練に先立って隊列の点検が行われた。そこには、訓練服に背負い袋を背負った総書記の姿もあった。
その日から野営生活が終わるまで、総書記は学友たちと変わりなく一日も欠かさず訓練に参加し、決められた日課を違えずに生活し、食堂の勤務や衛兵勤務も行った。
兵士としての総書記の姿勢は、常に全学友が見習うべき模範であった。
総書記が訓練に参加した最初の日のこと。
大隊民青委員長が小隊の中に混じって食堂に入って来た総書記に、別に用意してあった食事を運んで来た。それは米飯に山菜のあえ物、豆腐の煮込み、ネギの炒めだった。
総書記は、別に整えた物をぼく一人が食べるのは面白くない、たとえわずかずつでもみんなで分け合って味なりともみようと言って分隊員に分け与えた。
同じ食卓を前にした小隊員たちが気まずい思いで食事をするかも知れないとおもんぱかり、民青委員長にはなんとも言わず、このように処理したのである。
食事を済ませた総書記は政治部の幹部に会い、誰がそんな食事を考え出したのか、ぼくがそんなことを喜ぶとでも思っているのかとなじった。しばらく口をつぐんでいてから、ぼくは白頭山で小さい時から食べ物や衣服がまともなものでなかったので大変な苦労をした、それでぼくは、雑穀飯に青トウガラシやネギを味噌に付けて食べることを好んでいるし、破れた靴や靴下も自分で直して履いていると言った。続けて、人々がおなかを空かしている時に、自分一人旨い物を食い、裏口営業などのようなものをこととしながら、贅沢三昧に暮らしている人間たちは良心も義理人情もわきまえず、天も恐れない無頼のやからであり、困難な時は平気で人民を裏切る危険な者たちだ、生活の中でよく見ると、人間は物を食べる時にその人間性があらわになり、食べることのために思想が変質する場合も多い、われわれはいつどんな場合も食生活をつつましやかにし、人民と全く同じように暮らすべきだ、ぼくは生涯人民と同じ釜の飯を食べ、彼らと同じ服を着、同じ屋根の下で情を分かち合って生きるつもりでいる、これがぼくの生活持論だ、これを違えたら、ぼくは人民の子、人民の金正日ではなくなると力をこめて言った。

総書記の属する小隊が食堂当番になった時、小隊長が総書記を食堂の仕事からはずそうとした。けれども総書記は、自分は食堂で兵士の義務を果たし、炊事の仕方も習おうと思うと言って、煮物の湯気が漂う炊事場で食事の準備でせわしなく立ち働いた。

野営参加者のために自分用に残しておいた味噌汁も惜しみなく提供して、生ネギと味噌だけで食事を済ませることもあれば、食卓に盛り沢山のおかずを並べてみんなを喜ばせたこともあった。

この野営生活の日々から長い歳月が流れ、総書記が人民軍部隊を視察していた際に兵士たちの食生活に深い関心を寄せることを常としたのも、御恩洞の軍事野営における兵士生活の経験から彼らの心情を十分に知り尽くしていたことに起因していると言えよう。

朝鮮のために学ぼう

金正日総書記は戦後、**「わが国のものをもっとよく学び、それを輝かせよう！」**というスローガンを提示し、自らその模範を示した。

総書記は当時学友たちに、ぼくたちはみな朝鮮革命の明日の主人だ、ぼくたちは金日成元帥のお教え通り、数学をしても、文学をしても、また歴史をしても、ひたすら朝鮮革命に役立つ人間にならなければならない、だから、わが国のものをもっとよく学び、それを輝かせることに努めようと強調した。

総書記は常に高い目標をかかげ、自然と社会についての幅が広く奥深い知識を全面的に深く習得していった。

その学習態度がいかに情熱的であったかは、慣れ親しんだ内閣

事務局の図書室に残したエピソード一つを通してもはっきり理解しうるであろう。

当時、内閣事務局図書室は、国内で最も多い蔵書を誇る図書室の一つであった。

総書記がこの図書室を利用し始めたのは、中学進学を間近にした1954年8月からだった。

初めてここへやって来た日、図書室の司書が総書記に向かって、この図書室には、わが国と世界各国の主な図書や新聞、雑誌、画報などが3万部余りあると説明し、それらをみんな読むにはどれくらいかかるかという質問に、一生かかっても時間が足りないでしょうと答えた。

数日後にまたやって来た総書記は、司書に、ここにあるよい本をみんな読もうと思うと言った。

司書はその言葉が単に強がって言ったものだろうと思って、励ます口調で、そうしたら世界記録を立てることになるでしょうから、図書室の方でも積極的に便宜をはかりますと言った。

こうしたいきさつで総書記は当図書室の固定読者になり、放課後はここへやって来て読書に熱中した。

中学に進学してからは、図書室の出入りがより繁くなった。

総書記は、放課後、少年団や民青の活動を指導し、妹の勉強を見てやるなどで暇な時間はあまりなかった。それでも図書室に毎日なんとしても出掛け、時間が切迫している時などは走って行くこともまれでなかった。それで司書は戸外でせかせかと歩く足音がすると、総書記に違いないとして、急いでドアを開けるようにさえなった。ある時は、書庫に総書記がいることも知らずみな退勤してしまったこともあった。

その読書熱がいかに大きかったかは、図書室の図書貸出簿を見るとよく分かるであろう。

そこには金日成主席の著作、マルクス・レーニン主義創始者たちの著書はもとより、世界各国の政治・経済・文化・軍事書、それに養鶏や料理法などなど数かずの図書が含まれていた。それで後日、新任の図書室長は総書記用の図書貸出簿を参考にして図書室の蔵書状況を大ざっぱに確かめたと言われているほどである。

総書記が金日成総合大学に進学した後のある日、この内閣事務局の図書室へ出掛けて、何か読む価値のある図書があったら紹介してほしいと言った。それで顔なじみの司書が書庫でいちいち丁寧に本を見て歩いたが、無駄骨だった。読み落としたと思われる図書を見つけることができなかったのである。

10代の6年間の中学時代に総書記は内閣事務局の蔵書を読破したのであった。

それで図書室の司書たちはそれぞれの体験談をまとめた図書を出版し、わが図書室に残した総書記の新記録は、抜群の新記録である、中学時代の総書記は恐るべき篤学の士であり恐るべき情熱家であったと評した。

朝鮮革命に尽くそうとの確固とした自覚、朝鮮をより立派に光り輝かせていこうという燃えるような情熱が生んだものであるがゆえに、それは万人の驚嘆を呼んだのである。

金正日総書記は情熱的な学習によって模範を示すと共に、学友や教員が自国のものを大切にし、より真摯に学び、光り輝かせていくよう励ました。

1957年春のある日、平壌第1中学校の生物研究サークルの学友が、ペンギンについての資料を提供してくれまいかと頼んだ。サークルで行う研究発表会にペンギンの生態について発表する予定だが、資料が貧弱で困っているとのことであった。

総書記は、なぜわが国に棲む鳥を研究せず、遠い南極に棲むペンギンを研究の対象に選んだのかと聞いた。

彼は、わが国の鳥を研究していては、サークル員としての面目が立たない、生物研究サークルの一員であるからには、一般の生徒とは違った知識を身につけているべきではないか、それで自分たちのサークルでは主に外国の動物や植物を選んで週に1回研究発表を行っていると言うのであった。

総書記はあきれて、じゃあ一つ聞きたいことがある、わが国に多いツバメについて知っているのかと質問し、その生態に関するいろんなことを詳しく説明した。続けて、わが国にいるこのような有益な鳥についてはよく知りもしないで、一度も見たことのない南極の鳥を研究するなどというのはあきれた話じゃないか、にもかかわらずわが国の動植物の研究をするのは生物研究サークル員の面目が立たないなどと言えるのか、ぼくたちは歴史を学ぼうが、地理を学ぼうが、生物を学ぼうが、わが国の革命と建設に切実に必要な知識を学ぶことにその目的を置くべきだ、ぼくたちが南極へ行って革命をするのか、はたまた熱帯地方へ出掛けて建設をするのか、ぼくたちが暮らすにも朝鮮で暮らし、革命をするにも建設をするにも朝鮮でしなければならない、そのためにはわれわれのもの、朝鮮の現実を詳しく知らなければならないのだと言い聞かせた。そして彼に、朝鮮の鳥類の研究に参考になる幾つかの本と資料を与えた。

総書記の指摘に大きな刺激を受けたこの生徒は、ツバメの研究を熱心に行い、その結果をサークルの研究発表会で発表して一同の絶賛を浴びた。

彼の研究発表が発端となり、当校の生物研究サークル員たちは、朝鮮の益鳥を保護し増殖する活動に力を入れた。そのニュースは新聞紙上に写真入りで報道され、全国に広く知られるようになった。この事実は大勢の生徒たちを刺激し、彼らの心を動かした。

朝鮮のために学び、祖国を光り輝かせようと志す金正日総書記の高邁な意志は、高級中学校の卒業後、金日成総合大学に進学したことで集中的に表現された。

金日成総合大学は、国の解放後間もなく、金日成主席が新しい国づくりにとって何よりも重要なことは人材の育成であるとして、人民の初の大学として立ち上げた大学である。

建設が本格的に進んでいたある日、金正淑女史はわが子の手を取って建設場を訪れ、以前山で戦っていた頃、夢にまで描いた人民の大学が今ここで建設されている、お前も早く大きくなってここで勉強し、お父さんをしっかり助けるのよと言った。

総書記はこの日の母親の言葉を忘れることなく成長していった。

総書記が高級中学校の卒業を間近にした頃、人々の間では総書記の進学問題と関連してあれこれと取り沙汰されていた。

人々の推測はまちまちではあったが、総書記がいかなる分野を選ぶにしても外国への留学を希望するだろうという点ではおおよそ一致していた。

中学の卒業を前にした総書記は、ソ連のモスクワ総合大学を参観する機会があった。その時、案内者が、やがて高級中学校を卒業したら当大学に留学するようにと勧めた。

これに対して総書記は、そのお言葉は大変有り難いが、わが国の平壌にも立派な大学があります、わたくしはわたくしの学友たち

と一緒に金日成総合大学で勉強することにしていますと答えた。

こうして、1960年9月、金日成総合大学に進学したのであった。

入学初日、総書記は大学の位置する龍南山（リョンナム）の頂に立ち、金日成主席の高邁な志を習い、チュチェの革命偉業を完遂せずにはおかないとの固い誓いをこめて1編の詩を詠んだ。

この詩は今日も朝鮮人民の間で広く愛唱されている**『朝鮮を輝かさん』**である。

金正日総書記は大学入学後も、すべてを朝鮮革命の要請と国の具体的な実情に即して、学習の上で主体性を強く確立していった。

外国の教科書をほとんどそのまま翻訳した教材をもって進める教条的な講義がわが国の実情にはそぐわないとして、このような偏向を是正し、主体的な見地に立脚して政治・経済学の教材と講義案を作り直すようはからった事実は、今なお広く世に語り伝えられている。

この出来事は、学生金正日総書記の発起により、朝鮮で主体的立場が具現された新しい政治・経済学を導出する出発点となった。

当時マルクス・レーニン主義の古典を絶対視し、既存の理論にしがみついて右往左往していた学生たちの古い学風は一朝にして覆されるものではなかった。

何か一つの問題をもって学生たちの間で論戦が交わされると、古典の命題を機械的にそらんじて甲論乙駁し、しまいには荒唐無稽な理論まで飛び出した。論戦は止むことなくいつ果てるとも知れない様相を呈することもまれでなかった。

総書記はたまりかねて、そのような事態を一日も早く克服し、学習気風を一新しなければと思った。

総書記はクラスの初級幹部たちと、学生たちの学習方法を抜本的に改める問題について討議を重ねもし、1961年3月には1万ページ読書運動の展開を提唱した。

この1万ページ読書運動の主旨は、金日成主席の著作をより一層多く読み、主席の革命思想を体系的、全面的に深く学ぶことにあった。

こうして学生たちはどこにいてもわずかな時間をも利用して主席の著作を学習し、そうした中で主席の哲学思想を理解し、そこにこもる新しいカテゴリーや法則を把握し、科学の真理を会得していった。

総書記は、活気にみちて繰り広げられているこの運動を一層深め広げていくべく、1万ページ読書運動の歌を作ることを思い立ち、その作詞作曲を指導した。

日と共にこの運動はますます活発になり、新しい軌道に乗り始めた。

一学級に始まった1万ページ読書運動は、いつしかその範囲を脱して学部へ、さらには全校へと広がり、構内のいずこを問わず、1万ページ読書運動の歌声が響くまでになった。

マルクス・レーニン主義の古典を鵜呑みにし、絶対視する習慣から完全に脱皮しうるようにしたこの運動は、実に革命的な学風を確立する上で一つの大きな転換であり、革命であった。

総書記の唱導した1万ページ読書運動は、学生たちの科学の探究はもとより、その思想活動及び教育において主体性を本格的に確立していく上で重要な一翼を担った。

総書記は後日、この日々を追憶して、われわれはマルクス・レーニン主義古典への崇信から脱皮し、金日成主席の著作の学習へと

方向を転換することを重要な問題として打ち出し、主席の著作の学習を基本とする1万ページ読書運動ののろしを上げ、その炎が全校内に燃えさかるようにしたものですと語っている。

ひたいに汗する人たちの中で

破壊を伴わない戦争はないというが、祖国解放戦争における朝鮮国土の破壊はそれこそ無残を極めた。

金正日総書記は、戦後、金日成主席に伴われて国内の各地を見て回ったが、それらの地はいずこを問わず、惨憺たる様相を呈していた。

とはいえ、総書記は、廃墟に化した祖国の惨状を目の当たりにして単に胸を痛めていただけではなかった。その間、戦後の復興建設に沸く国の津々浦々で、炉回り工・鉱夫・農民・商店の販売員、それになみの主婦に至る大勢の人たちの姿に接したが、その誰もが口を揃えて言う言葉は、戦争に勝ったのだから、復興建設は問題ないということだった。

その度に総書記は、人民の枯れることのない無尽の力を思い知り、ひたいに汗する人たちと共に生きる喜びにひたった。

休戦直後のある日、級友の一人が総書記に向かって、君は金日成元帥としょっちゅう一緒にいるから、本当にいいな、と羨ましそうに言ったことがあった。

総書記はそんな彼に、お父さんはとても忙しくて、一緒にいられない日の方が多い、現地指導に出掛けることが多いし、それ以外の日も夜遅く帰るのでなかなか会えないんだとして、こう続けた。

「戦争は終わったばかりだし、何もかも破壊されてしまったんだから、本当に忙しいのだ。国のすべてのことを手がけなければならないのだから、夜もまともに眠れないし、食事もままにできずに苦労しているお父さんのことを思うと胸が痛むばかりだ。今はぼくが子供の身なので、お父さんを大きく助けることができないから残念でならない」

このように思いつめていたがゆえに、戦後の復興建設当時、全国の少年団員が繰り広げ、建設に大きく役立てた愛国的な煉瓦集め運動を発起しもし、また、ぼくたちの手でぼくたちの学校を立ち上げようとのスローガンをかかげて全国すべての学校で燃え上がったぼくらの学校・ぼくらの教室整備運動ののろしを上げた先導者にもなったのであった。

総書記は全国に大変革、大飛躍が澎湃として起きた歴史的なチョンリマの大高揚期にも諸所の建設現場で玉の汗を流した。

総書記が級友の民青員たちと連れ立って首都の建設現場に駆け付けたのは、1958年の5月初めであった。

当時、平壌市は驚くべき速さで変化していた。至る所に高層建築が建てられ、大通りが網の目のように広がっていく中で、住宅街や遊園地が次々に現れた。全市が一つの大建設場であった。

国の建設史に誇らしい一ページを飾った平壌市2万世帯住宅の建設が開始されたのもその頃であった。

首都建設支援労働の作業に着手することになった日、建設現場の技術指導員は、生徒たちの責任者金正日総書記に、生徒たちはここで組み立て式建築用の部材を生産することになるとして作業工程について説明し、特にモルタルづくりは埃が多く立ち、最もきつい仕事だから、体の丈夫な生徒たちで作業組を組むようにと言った。

総書記は早速、それぞれの工程別作業組を組み、自身はモルタルづくり組に加わった。

現場技術指導員は総書記の手際のよいシャベル使いに感嘆し、引率教員にあの生徒たちの責任者の働きぶりはとても素人とは思えないと言った。

教員があの生徒は金日成元帥のお子さんだと教えると、彼は目を丸くして、冗談でしょう、まさか元帥のお子さんがこんな建設作業に加わるわけがありますかとかぶりを振った。それで教員は、元帥のお子さんは幼い頃から働き好きで、戦後の復興建設時代からは級友の先頭に立って、いろんな建設労働に参加していると話した。

指導員は、生徒たちの作業を毎日指導しながら、とりわけモルタルづくりに励む総書記の働きぶりに注意をこらした。

それまでの作業基準を突破しながら作業を進め、セメントが無くなると、その到着を待つのではなく、セメントの置き場へ駆け付け、セメントの粉にまみれながらセメント袋をかついで来ることもあった。

一時他の作業を任ぜられた時には、もっこを背負って仮設の木製階段を登り降りもし、終業後は遅くまで作業場を整理してから帰り、翌朝は誰よりも早くやって来て、その日の作業準備を行った。

そんなわけで、総書記は誰よりも多くの汗をかいた。朝着替えた作業服が半日も経たずに汗に濡れ、塩基で白ばんでいた。

ある日、慰問の間食をたずさえてやって来た生徒の母親たちが総書記に、健康に気を付けて働くようにと言った。

すると総書記は彼女たちに、みなさんもご承知のように、今平壌市には数多くの住宅や新しい市街が建てられています、やがてそれらがすべて完成したら、首都平壌はずっと壮大になり、家々の

窓からは楽しい歌声が流れ出ることになるでしょうし、母親たちは可愛いわが子の手を取って大通りを歩くようになるでしょう、その日のことを思い浮かべると、どんなに汗を流してもちっとも疲れはしません、と言った。

それらの日々、総書記と共に平壌市の建設に参加した生徒の一人がたまたま総書記の日記を読んだことがあったが、そこには次のようなくだりがあった。

「すでに午前零時もかなり過ぎた。

森羅万象が静かに眠る深い夜だ。

けれども四囲は静寂に包まれているのではなく、そこからは沸き立つ現実の力強い歌声が聞こえてくる。

流暢なトランペットの音にも似たクレーン信号員のホイッスルの音、その音につれて動くコントラバスの音さながらに聞こえるクレーンの動く音、テノールの音響のように聞こえるトラックの警笛の音、タンバリンの音を思わせる溶接棒の発する音、ほかの場合はあんなにやかましかったミキサーの回転音も今夜はチェロの音のように柔らかく聞こえる。時々遠くからチューバの音のような太い重い汽笛も響いてくる。

これらすべての現実は、一つの大交響曲を連想させる。

ぼくの現在の心境は、まるで大交響曲演奏の指揮者にでもなったかのようである。

偉大な朝鮮の偉大な夜だ。

人はみな深い眠りに落ちている深夜、あの人たちはなぜ夜のしじまを破って働いているのだろうか。

彼らはまさに時代を早めるべく、祖国の輝かしい明日を早めるべく奮闘する金日成元帥の真の革命戦士、朝鮮の労働者たちなのだ」

この文は、創造に湧き立つ朝鮮人民をたたえる賛歌であり、ひいてはチョンリマ時代の誇らしい労働を楽器の音と結びつけて謳ったもので、金正日総書記の高邁な風格をよく見せている。

1カ月に余る首都建設支援労働を終えた日、総書記は次のような意義深い言葉を残した。

「後日、ぼくたちが壮大華麗な平壌の市街を歩く時、自分たちの貴い汗と情熱を首都の建設に捧げたという大きな誇りと自負を抱き、今日のこの日を感慨深く振り返ることになるでしょう」

総書記は中学時代、このほかにも東平壌青年通りの汚水管工事、平壌学生少年宮殿の建設、大同江（テドン）の護岸工事など首都の幾つもの建設に参加した。

金正日総書記が1961年5月15日から6月4日まで金日成総合大学の学友たちと共に臥山（ワサン）洞—竜城間の道路拡張工事に参加し、そこで見せた気高い手本は人々の記憶に強く焼きついている。

平壌紡織機械製作所における生産実習を終えて帰った総書記は、数日後また作業服を着て道路拡張工事現場へ向かった。

現場に到着すると、直ちに学友たちと共に力に余る工事の先頭に立って昼夜を分かたぬ戦闘に取り組んだ。

終日ハンマー仕事もすれば、天秤棒がたわむほど土を盛ったもっこをかついで休みもせず走りもすれば、急いで貨物駅に駆けつけて貨物を運んで来なければならなくなった時は食べさしの弁当箱を置き去りにして、真っ先にトラックの荷台に飛び乗ったこともあった。

いつか、掘削機が故障を起こした時は、その部品を持って機械工場へ駆け付け、修理してきたこともあったし、にわかに豪雨に見舞われて、掘ったばかりの汚水溝に雨水があふれんばかり流れ込んだのを見て、腰まで浸かる水の中へ入り、水のはけ口を開い

て雨水の被害を未然に防いだこともあった。

総書記は、道路拡張工事に参加したすべての人たちがお互いに助け、導き合って集団的革新を起こすように導いた。

社会主義競争の総括を前にしたある日、隣接小隊が他より困難な工事区間を担当し、実績を上げることができないでいるとして、自分たちのブルドーザーをそこへ回して支援し、工事全般が一様にはかどるようにした。

道路拡張工事の中で総書記が見せた率先垂範のエピソードの中には、大勢の人たちに広く知られている3人2天秤棒についての話もある。

3人が2本の天秤棒をかつぐこの方法は総書記が考案したものであるが、そんな方法が出現すると、全工事場の至る所で3人2天秤棒をかつぐ人たちが続々と現れた。

作業能率を上げたこの新しい方法は、総書記が自分をあくまでも建設者の一人であると心底から認識していたがゆえに考案をなしえたのである。

首都の諸建設場で貴い汗を流した日々は、その後の長い歳月、総書記の深い追憶を呼んだ。

あれから数十年を経たある日、総書記は、新作の歌謡『明けるな　平壌の夜よ』を聞いた。

静かな平壌の夜、大同江のほとりを歩み、首都の建設に玉の汗を流した日々を振り返る主人公の心情が深くこもるこの歌謡を聞きながら総書記は、社会主義祖国の隆盛・繁栄をはかる万年の大計の創造物を創り出す労働に青春の汗と情熱を捧げた人たちだけが人間の真の幸せと誇りを抱きうるのだとして、感慨深く若い日々を振り返った。

3

輝かしい転変を遂げる日々に

金日成総合大学を卒業した金正日総書記は、1964年6月から朝鮮労働党中央委員会で活動することになった。

金日成主席はその時、総書記が党中央委員会入りして党活動はもとより、諸分野についての豊かな経験を積み、チュチェの革命偉業を一貫して継承し完成するよう期待した。

総書記が党中央委員会で活動を始めたことで、革命と建設の全般的分野で主席の指導をよりよく実現していけるようになり、その結果、政治、経済、軍事、文化など全般的な分野で新たな成果が達成されていった。

金日成主席の革命思想の歴史的な位置づけが科学的になされ、文学・芸術革命の火ぶたが切られ、社会主義経済の建設では速度戦が展開されて全国が沸き返った。

当時、総書記は、党活動のみならず、さまざまの部門の実態を把握し、活動を進めていく中で、自らの指導的実力をいかんなく発揮した。総書記の指導を受ける部門はどこでも、それまでとは比べようのない成果が収められた。このような驚くべき指導に、人民は驚嘆して総書記を敬慕して止まなくなった。

総書記は別して世人の注目を引くことなく党中央委員会に身を置いて活動を開始したのであったが、祖国と人民の前に積んだその業績は実に巨大であった。

時代思想の定式化

党中央委員会で活動を開始した金正日総書記は、朝鮮労働党の指導思想として公認されている金日成主席の革命思想を時代の思想として確固と位置づけるべく、思想・理論活動を精力的に進めた。

当時、総書記の活動範囲は日と共に拡大していった。

総書記は諸分野の活動に深い関心を寄せ、その活動領域が膨大であったために、常に多忙を極めていた。

そんな中でも総書記はマルクス・レーニン主義の古典を全面的に研究して再評価すること、言い換えれば、労働者階級の革命思想史を分析し総括する膨大な仕事に取り組んだ。

常に深い哲学的思索にふけりながら革命と建設を指導するその多忙を極めた総書記の執務室は、深夜にも灯の消えることがなかった。そういう訳で、人々は総書記の執務室の灯をさして「党中央の灯」と呼んでいた。

総書記がマルクス・レーニン主義の古典を全面的に解釈し、先行労働者階級の革命思想を分析・総括する仕事を進めていることを知った主席は、実によいことだとして、自身が使っていた書斎を譲り渡した。

元来、総書記は、時代と革命の実践という視点からマルクス・レーニン主義を分析し再評価する立場にはかなり前から立っていた。

1958年11月、ある幹部が金日成主席の邸宅を訪れた時、総書記

が読んでいた『共産党宣言』をのぞいてみたことがあった。そこにはページごとにいろいろな符号が付けられてあったが、あるページの「労働者には祖国がない」という語句の下に赤鉛筆でアンダーラインが引かれて、上の余白に、**「いや、労働者には祖国がある」**と書かれてあった。その闊達な筆致は明らかに総書記のものであった。

総書記は大学時代にも主席の著作を全面的に学習する一方、先行の理論書もかなり読んで、内容を分析していた。それらの本の余白には、**「価値がある！」「重要な問題が提起されている」「仮説としての見解が述べられている」「現代にはよく合わない」**などと、総書記の見解が書かれてあった。

総書記が大学時代に進めた思想・理論活動における業績は、その後に行った労働者階級の革命思想史に対する分析・総括の過程に一段と豊かになり、主席の革命思想を定式化する上でそのいしずえとなった。

総書記は大学卒業後も先行の革命思想を分析・総括する努力を中断しなかった。

ある活動家が、大学在学当時より読書量が増えたようだと言ったことがあるが、これに対して総書記は、ある人たちはわたしに、外国へ留学して3年ばかり勉強してはどうかと勧めてくれた、実はわたしも大学卒業後3年ほどだけ勉強したいと思ったが、外国へ行って勉強しようという気持ちにはなれなかった、哲学の大家である金日成主席がおられ、先生のわが人民もいるのに、なんのためにこのすぐれた大文献庫を見捨てて外国へ行って勉強をするのか、わたしはこの立派な書斎を学校と考えて3年ばかり独学することにした、と語った。

当時、総書記は非常に多忙な日々を送っていたが、毎週決めておいた日には、きまって討論を行った。

後日、総書記は当時を振り返って、自分はその頃、マルクス・レーニン主義の古典を改めて熟読した、『資本論』は3度も繰り返して読んだと言った。

総書記は、先行した労働者階級の革命思想史を総括すべく、まずマルクス・レーニン主義の歴史的な功績と地位を解明し、その上で現代の時点における時代的・歴史的・理論的制限性を哲学的な見地から明確に指摘した。これは私心を混じえない公明正大な評価であった。

この研究過程に総書記は、チュチェ思想の創始後数十年が経過しているにもかかわらず、自主時代を拓き、社会主義偉業の最終的勝利に向けた最も科学的な戦略と戦術を提示したその偉大な思想の歴史的な地位が明確に規定されていないことに胸を痛めた。

総書記は、広範な大衆が歴史と自らの運命の主人として登場した自主時代の歴史は当然、チュチェ思想の歴史として明確に規定されなければならないとし、自主時代はチュチェ時代と命名されてしかるべきだと確信した。

総書記は、朝鮮革命の歴史的な実践過程を全面的に研究し、分析する中で、主体性こそ朝鮮革命の真髄であり、その根本的特徴をなすということを発見した。

併せて、万人の共感を呼ぶ牽引力からしても、金日成主席の革命思想はまさしくその名とのみ結びつけて呼ばれるべき独創的な思想、新しい時代思想であると確信した。

このようにして総書記は、革命と建設の重要な課題を処理する多忙を極めていた中でも、労働者階級の長期にわたる革命思想史

を3年間にして全面的に分析・総括した。

金日成主席の革命思想に対する総書記のこのような精力的な探究過程は、主席の革命思想は真理であると、総書記が強く確信していたことを証左するものであった。

他方、総書記のこの哲学的探究過程は、主席の革命思想をやがて時代思想として定式化し、その思想史的地位を解明していく上での一つの礎石をなす重要な契機となった。

1970年代初のある日のこと。

世界各国から主席に贈られた献呈品を見ていた総書記は、それらの中に表紙がかなりすりむけ、色のあせた小冊子の前で足を止めた。

それは外国語で出版された主席の著作の単行本であったが、それが朝鮮に持って来られることになったいきさつは実に劇的だった。

アフリカのある国で民族解放闘争を繰り広げていた一闘士が、戦闘のさなかに致命傷を負い、臨終を前にして、肌身離さず持ち歩いていたこの小冊子を同志たちに渡して目を閉じた。

その際彼は次のような言葉を残した。

「同志たち、われわれはみな長年精神的に彷徨していたが、遅まきながらチュチェ思想に接して正しい闘いの道を見いだした者たちだ。チュチェの航路に沿って進めばわれわれは勝利するであろうし、その道から脱線すれば、われわれの闘いは難破船の運命を免れないだろう……。

ぼくは、われわれが見いだしたチュチェの真理をあくまでも守ってもらいたいという意味で、この本を同志たちに残していくから、どうか心にとどめておくようお願いする」

彼の同志たちはその遺言をきっと守ろうと誓い合い、彼のその遺品をチュチェ思想の故郷朝鮮へ贈ったのであった。

その数日後、総書記はきっぱりと言った。

世界の人民はチュチェ思想を自らの信念として受け止めています。チュチェという語は、世界の誰もが知っている朝鮮語です。何よりも大きい牽引力をもって万人の心を捉える世界の共通語です。……

金日成主席の革命思想を主席の名と結びつけて金日成主義と称する時はすでに成熟しましたが、実際は遅れたと言えます。

1974年2月19日、金正日総書記は朝鮮労働党第3回思想活動家大会の結語で、主席の革命思想を金日成主義と定式化して世界に宣言した。

この日総書記は、金日成主義はチュチェの思想・理論及び方法の体系、言い換えれば、チュチェ思想とそれにより解明された革命と建設に関する理論と方法の全一的な体系であると宣言した。

金日成主席は後日、自らの革命思想を思想・理論・方法の全一的な思想体系であるとした総書記のこの定義は実に有名な定義だと語っている。

総書記は、主席の革命思想の歴史的地位を模索していた日々に、主席の革命思想はマルクス・レーニン主義のどの古典にもまさる幅と深さを持っており、人類の未来を代表し、人類の存在と共に永遠に生きるチュチェの革命学説である、今日われわれは、われわれの時代に革命闘争と建設事業を勝利に導く指導思想は金日成主席の革命思想＝チュチェ思想以外にはないと胸を張って主張しうると確言した。

分厚い原稿には目もくれず、ただ一度の反復を行うこともな

く、重要なくだりには力点を置きながらユニークな魅力的言語表現を駆使して長時間話し続けるその非常な雄弁術に、聴衆はただ感嘆し、時間の流れにも気を奪われなかった。演説が終わると、会場は万歳、万歳の歓声にどよめいた。

総書記のこの歴史的な演説に接した人たちの感激は形状しがたいほど大きかった。人々はこの演説が2月19日に行われたとして、「2月の宣言」とたたえて止まなかった。

総書記は、主席の創始したチュチェ思想を自主時代の発展と革命の実践の要請に即して全一的に体系化し、全面的に発展させることでその内容を一段と豊かにした。

チュチェは、朝鮮革命を朝鮮人民の要請と利益に即して進めなければならないという深い意味を内包しており、主席の革命思想はほかならぬチュチェの確立に関する思想、人民大衆が革命の主人として自主的な立場と創造的な立場を堅持すべきだとする思想である。

実践的にもチュチェは朝鮮労働党の生命となっており、朝鮮労働党の歴史はチュチェを確立する闘いで貫かれている。チュチェ思想を指導的指針にして党・政権・軍を建設し、革命闘争において持ち上がるすべての問題をチュチェ思想の要請通りに解決したところに勝利の鍵があった。

総書記がチュチェ思想を時代の要請に即して一段と発展させ豊かにしてきた過程は、主席の革命思想をさらに完成していく新たな思想史を創造する過程であった。

この時期、世界の各大陸でチュチェ思想を信ずる人たちが続々と現れ、自主時代のチュチェ思想信奉の熱風は世界の趨勢となった。

早くから個々の先覚者によって進められていたチュチェ思想の研究・普及活動は、1960年からチュチェ思想研究グループの形態をもって活発に進められ、1970年代に至ると、その数は多くの国において100を越えるほどになった。

総書記は早くも1960年代の大学時代に、チュチェの哲学思想を幅広く解釈した多くの著作や論文を発表していた。

総書記は、世界的な領域でチュチェ思想研究グループが結成され、チュチェ思想に学び、それを解説・宣伝するチュチェ思想信奉者たちの活動が積極化していた1970年代以降には**『チュチェ哲学の理解で提起される若干の問題について』『チュチェ哲学に対する正しい観点と理解をもつために』『チュチェ哲学は独創的な革命哲学である』**をはじめチュチェ哲学を正しく理解する上に必要な多くの著作を相次いで発表した。

総書記がチュチェ思想を体系化し集大成した代表的な著作は、金日成主席の生誕70周年を前にした1982年3月31日に発表した論文**『チュチェ思想について』**である。

総書記はチュチェ思想に関する論文の執筆で、チュチェ思想の幅広くも深い内容を漏れなく全一的に体系化しながらも高度に短縮して明確に叙述している。

総書記が長年の革命思想発展史を総括した上でチュチェ思想を全面的に総合・体系化した論文**『チュチェ思想について』**は単行本で80余ページに過ぎない。けれどもその内容は実に膨大である。

ここで叙述されたチュチェ思想の創始、チュチェ思想の哲学的原理、チュチェ思想の社会歴史原理、チュチェ思想の指導的原則、チュチェ思想の歴史的意義、この5項目の構成体系からして

も、チュチェ思想の歴史的根源と基本的原理、その思想史的な地位が完璧な調和をなして集大成されていることを容易に理解しうるであろうし、チュチェ哲学を支えている理論的な骨組みも瞬時にして推察できるであろう。

『チュチェ思想について』が発表されると、朝鮮国内はもとより世界各国人民の大きな反響を呼び、1年足らずで90余の国の出版物の総1000万部に掲載され、144カ国で単行本として出版された。

『チュチェ思想について』が嵐のような反響を巻き起こしているとの報告を受けた総書記は、自分が論文を立派に書いたせいで反響が大きいのではなく、金日成主席の革命思想が偉大であるからこそ反響がそれほど大きいのだと謙虚に語った。

チュチェ思想の巨大な牽引力と時代の前途を明るく照らすその炎の光を象徴して、1982年4月、朝鮮の首都平壌の大同江畔にチュチェ思想塔が立派に建てられた。

いつだったか、金正日総書記は大同江のほとりを通りすぎながらチュチェ思想塔を見上げて、自分が主席の革命思想を定式化するために学窓時代から読み続けた本をすべてきちんと積み上げたら、恐らくあのチュチェ思想塔の土台石ほどになるかも知れないと、深い感慨をこめて言った。

今もチュチェ思想は、時代の要請、人民の一致した志向と念願をこめて、人民大衆がわが運命の主人として自らの運命を拓いていく道を照らす革命の学説として、朝鮮人民はもとより、世界の進歩的人民の中で巨大な生命力を発揮している。

文学・芸術革命の砲声

1960年代初期まで朝鮮の文学・芸術分野は古い立ち遅れた思想の影響をたぶんに受けていた。この弊を改めないでは新しい文学・芸術の創造は順調に進み得ない。

1964年のある日、朝鮮劇映画撮影所の幹部に会った金正日総書記は、金日成主席が文学・芸術分野、とりわけ映画芸術に深い関心を寄せている、主席のお望み通り、すぐれた映画を多く作るために努力しなければならないと語った。

1964年12月、総書記は主席に随行して朝鮮劇映画撮影所を訪れた。

主席は撮影所で党中央委員会政治委員会拡大会議を開き、革命的な映画をより多く作る問題について強調した。会議では金正日総書記に、文学・芸術分野を担当してじかに指導するよう委任した。

翌年3月と12月、総書記は党中央委員会の関係幹部たちに、われわれが20世紀に革命的な文学・芸術のモデルを作り上げるためには、文学・芸術分野で一大革命を起こさなければならないと言った。

総書記は、主席が抗日革命闘争時代に創作した不朽の名作をまず映画化することから文学・芸術革命を進めることを決心した。

1967年2月、映画部門を担当しその指導を行う中で見いだして育成した優秀な創作家たちをもって、白頭山創作団を組んだ。

翌年4月には、劇映画部門の制作スタッフに主席の不朽の名作

『血の海』を映画化する課題を与えた。

総書記は、原作に忠実でしかも劇映画の形態上の特性を正確に生かすことを根本的な原則とすべきだとして、主席が『血の海』の脚本を作った動機と意図、当時の社会的・歴史的環境、作品の思想的・芸術的特性と認識的・教育的意義などについて詳しく示した。

これにとどまらず、演出、俳優の演技、撮影、美術、音楽などに至るまですべての問題について詳細に示し、ほとんど毎日撮影所に出掛けて映画の制作を指導し、映画のすべてのシーンが名シーンとして完成できるよう心血を注いだ。

こうして劇映画『血の海』は、1969年末に立派に完成した。

続けて総書記は、主席の手になる不朽の名作**『ある自衛団員の運命』**の映画化を始めた。総書記の精力的な指導を得て、劇映画『ある自衛団員の運命』の制作はわずか40日間で完成された。

総書記は劇映画『ある自衛団員の運命』の制作過程を通して実践的に実証した速度戦の手本を文学・芸術分野の全般に押し広げ、ひいては社会主義建設の基本的な戦闘方式として定着させた。

総書記は、主席の不朽の名作**『花を売る乙女』**を映画化した劇映画『花を売る乙女』を人情・心理劇のモデル映画として仕上げるべく精力的に指導した。

この映画は、旧チェコスロバキアのカルロビ・バリで開催された第18回国際映画祭に出品され、世界の映画界を大きくゆさぶった。

総書記は主席の不朽の諸名作を映画化する中で、チュチェの映

画理論を編み出し、劇映画のモデルを世に出し、大衆の創造的な知恵と革命的な熱意を積極的に引き出して映画づくりを進める新しい制作指導システムと制作システムを整然と立てた。それで映画芸術分野では、内容と形式、制作システム、制作方法の全分野で大きな革新が起きた。

総書記は、映画革命を指導した日々に積んだ豊かな経験を集大成して、1973年4月、8項目の基本的な体系と47の小題目からなる古典的著作**『映画芸術論』**を発表した。

著作で、共産主義的人間学に関する独創的な理論、種子に関する理論、速度戦に関する理論を展開した。

そして、主体的な俳優演技の体系と方法、撮影と映画美術、映画音楽など、映画の制作における全般的な理論的・実践的問題についても独創的な深い解明を行っており、革命的な映画制作システムと制作指導システムについての理論など、チュチェの文学・芸術づくりにおける根本的な意義を持つさまざまの問題に全面的な解答を与えた。

総書記は映画革命についで、歌劇革命の砲声を高々と上げた。

当時まで朝鮮の歌劇の形式は西洋のオペラとか、朝鮮の伝統的な唱劇の古い形式に縛られて低迷していた。

1967年6月、総書記は文学・芸術部門の幹部ならびに作曲家たちを前にして、歌劇の制作でも古い形式を打破する革命を起こす必要性について語った。

その後、民族歌劇団の新作歌劇『陽光を胸に』を観て、歌劇に革新を早く起こさなければと決心した総書記は、1971年3月、人民大衆の美的感覚に合う新しい形式の歌劇を作るべきだとして、主席の不朽の名作**『血の海』**を歌劇化し、その制作を通して歌劇

革命を起こそうと強調した。

総書記は、革命的な内容と民族的な形式に基づいて、歌劇の現代化、通俗化をはかり、歌を有節化し、パンチャン（傍唱）を取り入れ、舞踊を歌劇に密着させ、流れ式の立体舞台を考案するなど、歌劇革命の基本的な課題と原則を明示した。そして、革命歌劇『血の海』の台本を短期間内に立派に書き上げ、歌劇の制作に集中的に取り組むための措置を講じた。

台本の作成には白頭山創作団の優秀なメンバーが引き入れられ、中央と地方の創作家や芸能人からなる強力な制作スタッフが構成され、歌劇制作の指揮部が組まれた。

総書記は、革命歌劇の緊張した制作が続く劇場にほとんど毎日やって来て、精力的に指導した。

それらの日々、総書記は、オペラの基本的な形象手段であるアリアとレチタティーボ（対話唱）を無くして、歌劇の歌が人民的で通俗的な、柔らかくも美しい有節歌謡で一貫されるよう、ずっと思索し続けた。

歌の有節化、これは西洋オペラにおいて絶対的とされているアリアとレチタティーボを廃し、歌劇を真に人民のものにならせた革命であり、創造であった。

一部の創作家が総書記の有節化方針を正しく理解できなかったせいで、アリアやレチタティーボの風を残した歌を作るようなことがあると、総書記は自ら歌詞や曲を直し、俳優の歌にも耳を傾けて、すべての歌が有節化され、しかも名曲として一貫されるよう細かく気を使った。

このようにして、革命歌劇『血の海』にはアリアやレチタティーボの痕跡が根絶され、人々の情緒生活の動きや人物の性格を多様

かつ豊かに描き出し、作品の劇性を高める新しい歌の形式である歌劇の有節化を立派に実現したのであった。

歌劇にパンチャンを取り入れてその芸術的効果を高めたのも総書記の独創的な発想によるものであり、総書記の並々ならぬ英知と創造的な探究によってもたらされた貴重な実りである。

パンチャンは舞台の外で歌われ、ドラマの世界を観客に語るもので、歌劇の内容を補充して説明するナレーターの役割を果たしていると言える。

歌劇の登場人物がじかに表現できない心情を代弁したり、時代の流れや歴史的な出来事、舞台で繰り広げられる出来事などを説明し、場と場、幕と幕を結びつけることも行うパンチャンは、驚くべき牽引力をもって観客を歌劇の世界へいざなった。

総書記は、パンチャンの効果を一段と高めるべく、その形式において規模や声部を多様にし、登場人物が相互に心を触れ合う歌をさまざまな形式で表現し、歌劇の必要な場面にパンチャンを挿入してその他の形象手段との有機的な結びつきを強めるようにした。

その結果、革命歌劇『血の海』の歌の形象は新しい境地に高められたのであった。

歌劇にパンチャンが取り入れられたのは、歌劇史上における大きな発明であった。

万寿台（マンスデ）芸術団が日本で公演を行った際、革命歌劇を観た日本の芸術界のエキスパートや観客は一様に、パンチャンの発明はチュチェ朝鮮の歌劇の中で初めてなされた大きな出来事だと絶賛し、世界のどの国の歌劇にもパンチャンはないのだから、朝鮮語の発音に従って呼ぶほかないと言ったものである。

総書記は、歌劇における舞踊を、登場人物の思想・感情と生活、それに主題と思想を表現し、舞台を多様に彩る必須の表現手段になるようにし、舞台美術も立体的・流れ式にされた新たな形式の舞台美術に模様変えするなど、ユニークで斬新な歌劇の形象手段を導入した。

革命歌劇『血の海』の制作を開始して4カ月後の1971年7月、平壌大劇場では金日成主席の臨席のもと、『血の海』の初公演の幕が開けられた。

歌劇を観覧した主席はたいそう満足し、思想性と芸術性が完璧に結びついた主体的で革命的な歌劇の制作がなされたと評価した。

『血の海』式革命歌劇の誕生を宣言したこの日、総書記は、主席の不朽の名作**『血の海』**を歌劇化し、歌劇革命の砲声を世界に向けて轟かせることで歌劇芸術の新時代を開いた革命歌劇『血の海』の創造により、われわれの時代の歌劇芸術の古典的モデルが形成されたと語った。

総書記は革命歌劇『血の海』の制作過程に積んだ貴重な経験を踏まえて、革命歌劇『党の真の娘』『密林よ語れ』『花を売る乙女』『金剛山の歌』などの制作を指導することで、5大革命歌劇の新しい歴史を開いた。さらにその後、革命歌劇『ある自衛団員の運命』と『明るい太陽の下で』を時代の傑作として作り上げるべく精力的に指導した。

総書記はこの過程に深い思索をもって、これら歌劇の台本から舞台の形象に至るまで具体的に指導し、すべての場面が高い境地で完成されるよう尽力した。

今日朝鮮で広く歌われている歌謡**『懐かしき将軍はいずこに』**

も歌劇革命の日々、総書記の精力的な思索と努力によって名作の誉れに輝くようになった歌の一つである。

総書記がこれほどに力を傾けて指導し完成した諸革命歌劇は、高度の思想性・芸術性と非常な感化力により、世界の進歩的人民の大きな反響を呼んだ。

1974年9月初め、総書記は歌劇革命において達成された成果と経験を踏まえて、チュチェの歌劇理論を全面的に集大成した古典的著作**『歌劇芸術について』**を発表した。

総書記は、映画革命と歌劇革命の成果とその経験に基づいて演劇革命を起こすことにも深い注意を向けた。

当時、朝鮮の演劇も思想的な側面では革命的だと言えたが、舞台の形式と形象方法では古い枠から抜け出していなかった。

1972年11月、総書記は国立演劇団の作家と俳優たちを前にして、チュチェ時代に即した新しい革命演劇を作るのは時代の差し迫った要請であり、演劇の運命にかかわる死活の問題であると強調し、金日成主席が抗日革命闘争時代に創作した不朽の名作**『城隍堂』**を時代の要請に即して改作すべきだとした。

1978年6月、劇場に赴いて国立演劇団の革命演劇『城隍堂』を観た総書記は、演劇革命のスタートが切られたとして満足を表しながら、作品にこもる生活の幅を一層広げ、登場人物の性格をよりよく生かし、ドラマづくりやせりふづくりもうまくすることなどについて具体的に指摘した。

同年8月、革命演劇『城隍堂』の試演を観た総書記は、試演は上出来だったとたたえ、『城隍堂』の制作によって古い演劇に終止符を打ち、演劇の新時代を開いたとして、大きな満足を表した。

総書記は、革命演劇『城隍堂』の成功と経験に基づいて、主席の不朽の名作**『血噴万国会議』『娘からの手紙』『3人1党』『慶祝大会』**を引き続き『城隍堂』式革命演劇として立派に作り上げるよう指導することで、演劇革命の成果をより深めていった。

総書記は、音楽、舞踊、サーカスの発展にも力を入れた。

万寿台芸術団が準備した音楽舞踊物語『楽園の歌』の制作を幾度となく指導して、現代の巨大な時代的様相を生き生きと展開してみせる舞台総合芸術形態の傑作として完成するようにした。

総書記は、サーカスにおいても主体性を確立し、スポーツと芸術を結びつけることをめざす朝鮮労働党の方針を立派に具現するよう指導した。そうして中心サーカス、空中サーカス、奇術などすべての種目を高い境地へ引き上げた。

総書記のすぐれた指導を得て、1970年代に文学・芸術は全面的な発展を遂げて花開き、朝鮮にはチュチェ文学・芸術の花園が大きく開かれた。

文学・芸術革命の日々、金正日総書記の偉人像を肌で実感した創作家や芸能人たちは、深い敬意と親しみをこめて、総書記を「親愛なる指導者同志」と呼び、その指導に心から従った。

われわれの方式で生きよう

革命と建設に対する金正日総書記の指導において1970年代は、徹底した主体的立場に立って革命と建設全般をわれわれの方式で

推し進めるようにした意義深い時期であった。

1970年代の後半期、総書記の執務室には一幅の風景画が新しく掛けられた。

それは、抗日武装闘争時期の1930年代中葉、朝鮮革命の司令部が位置していた腰営口(中国)の風景であった。

名勝や絶景の絵も多いのに、わざわざ腰営口の風景画を掛けたのには、総書記の深い意志がこもっていた。

大荒崴会議で民族排外主義者の詭弁をはね退けて朝鮮革命の主体的立場を守り抜いた金日成主席は、1935年3月、当面の難局を打開すべく腰営口で解放地区形態の遊撃区を解散し、武装闘争を広大な地域へと拡大、発展させるという戦略的な路線を打ち出した。

そんなわけで腰営口は、朝鮮革命の年代記に自主の分岐点、朝鮮革命の前途に横たわった難関に果敢に立ち向かった主体的な攻撃精神の象徴として記されている。

総書記が主体的な路線に基づいて朝鮮革命の新たな高揚が準備された歴史の地である腰営口の風景画を執務室に掛けたのは、腰営口に高く翻された自主の旗をさらに高く掲げ、チュチェの革命偉業を瞬時も中断することなく新たな高い段階へと前進させていこうとする確固たる信念と意志の発現であった。

1970年代に至って、全社会のチュチェ思想化の旗の下にチュチェの革命偉業を新たな高い段階に前進させるのは非常に重大な課題であった。

対外的に見ても、どの国も他国を助けようとせず、また助ける状況でもなかった。

総書記は、半世紀にわたる朝鮮革命の道程を振り返り、チュ

チェの革命偉業を勝利に向けて前進させるためには、われわれの方式で生きていくしかないと考えた。

もちろん、主体性を確立し、われわれの方式で生きる戦略は、この時期に初めて示されたわけではなかった。

金日成主席は早くから朝鮮革命の指導に当たってこの戦略を堅持してきたし、総書記も同じであった。

総書記は、幼い時から自国のものを熱烈に愛し、あたまから他国のものを絶対視し真似ようとする傾向を非常に軽蔑した。

平壌第1中学校在学中の1955年7月のある日のこと。

生物実験室で昆虫標本を作っていた一部の男生徒たちは、しばらくして互いに他人の標本と取り替え始めた。同じチョウやトンボの標本なのに、他人のものが自分のものより良いと考えたからである。

他人のチョウが大きく綺麗に見えて取り替えたものの、手にしてみるとあんまり気に入らなくてもじもじしている一生徒の行動を見て、総書記は生徒たちに、何でも自分のものを軽視する習慣がつくとそんな目に遭うものだとし、自分の家のキムチはまずいと思い込み、隣家のキムチが格別にうまいといって老妻を困らせていた老主人が恥をかく昔話を、その老人の身ぶり手ぶりを真似ながら面白おかしく話した。

そして、このように他人のものや他人のやり方だけを良いとすればどうなるだろう、そうなれば、自分自身と自分のものは他人に劣るという萎縮感にとらわれ、ひいては愛国心も、民族的自尊心も失うことになる、これはなんと胸の痛むことだろう、と教えさとした。

これは、中学時代にごく素朴な形態で表れた、自分のものを大

事にする総書記の確たる立場をうかがい知ることのできるエピソードの一つである。

そのような立場に徹していたがゆえに、総書記は、あらゆる問題をチュチェ思想の要求に即して思考し、解決するやり方をわれわれの方式と定義づけ、**「われわれの方式で生きろ、われわれの方式で闘え、われわれの方式で創造せよ」**という命題を打ち出したのである。

朝鮮の革命史に1978年12月25日が意義深く記録されたのは、この日にわれわれの方式の闘争方法が党の重要な戦略として提示されたからである。

この日総書記は、当面の内外情勢はわれわれをしていつにもまして主体性を確立し、われわれの方式で生きることを求めているとし、**「『われわれの方式で生きよう！』、まさにこれが、今日わが党が掲げている重要な戦略的スローガンです」**と宣言した。

そして、われわれの方式で生きるというのは、チュチェ思想の要求通りに自分の精神をもって思考し行動し、全てを朝鮮革命とわが人民の利益に即して自力で解決するということを意味すると述べた。

また、われわれはこれまで他国の真似をしたり、他国の後についたり、他国に頼ったりして生きてきたのではなく、われわれの方式で生きてきた、われわれは今後も他国はどうしようともわれわれの方式で生きていかなければならないと強調した。

後日、総書記は**「わが党はつとに『われわれの方式で生きよう！』というスローガンを打ち出しましたが、まさにこれがチュチェであり、自主であり、自力更生であり、ここにわれわれの尊**

厳があり、矜持と栄誉があります」と述べた。

総書記の数十年間にわたる革命指導の道程を振り返ってみて誰もが感嘆するのは、その革命活動の全過程があくまでもわれわれの方式で貫かれていることである。

1970年代末まで平壌の都心に残っていた環状線通りと呼ばれる古い市街をすっかり取り払い、われわれの方式のモデル通りを立ち上げたのも、建設で主体性を確立するように導いた総書記のわれわれの方式の指導の結果である。

解放前にはここに日本軍の兵営があったし、戦後には外国の住宅設計をそのまま真似た2、3階建ての住宅があった。一言で言って、長い間外国風が漂っていた市街だった。

1978年12月、ある設計技師を伴って環状線通りを見て歩いた総書記は、建築分野において教条主義を根絶するためには、一日も早くわれわれの方式の建物、われわれの方式の市街のモデルを建設して一般化させなければならないと考えた。

ことに、一部の建築家の間で世界に氾濫する異質の建築潮流に好奇心を持ち、あれこれと模倣しようとする傾向が現れていた状況下で、これ以上後回しにできない差し迫った問題と見なした。

総書記は、一部の人が建設陣も不足するので、環状線通りをいっぺんに改造しようとせず、住宅の一部をそのまま残しておいて漸次改造しようという意見を持っていると聞いて、今夜、現地を具体的に見て回ったが、いくら考えてもそういう方法ではいけないとし、すっかり取り払って新しい市街を立ち上げようと述べた。

万事をわれわれの方式で行おうとする総書記の創造観点は、このように環状線通りの建設初期からはっきり発現された。

ところが、既成の慣例にこだわっていた設計技師たちは、総書記の意図をすぐ理解することができなかった。

何回も助言を与えても設計技師たちが今なお今回の建設の意義をはっきり認識していないことを知った総書記は、ある日、環状線通りの住宅建設は単に一般住宅を建てる工事ではなく、首都をより壮大かつ華麗に建設するための雄大な事業であり、建設の形式と内容、質において新しいモデルを創造する誇らしい事業であるとし、次のように続けた。

われわれが創造した『血の海』式革命歌劇がわが国の芸術発展に偉大な転換をもたらした起点になったとすれば、今回の環状線通りの建設は1980年代に入ってわが国の建設部門に新たな変革をもたらす起点となるようにすべきです。

それで皆さんは、正しい観点と姿勢をもって『血の海』式革命歌劇を創造していた時のように環状線通りの改造で建設革命を起こさなければなりません。

建築実務上の問題よりもまず、設計技師たちの思考・観点や態度から根本的に変えるべきだとする意味の言葉であった。

このようにして環状線通りの建設が始まった。

その後、古い環状線通りの姿は跡形もなく消え去り、特色のある建物が立体的な調和をなして立ち上げられた。

完工した通りの全景を見渡した金日成主席は、**いくら見渡しても、以前の場所に違いはない、市街の形式を新しい方式で仕直したのだから、これほど高いアパート群を建てたにもかかわらず、地面も空も広々と開かれたように思える、これこそわたしが望んで止まなかったわれわれの方式の市街形成法なのだ**、と言って大きく笑った。

その時、幹部たちは建設に新たな変革をもたらすべく労苦を尽くした総書記に心から感謝のあいさつをささげた。

われわれの方式の新しい市街がほかならぬ今の蒼光（チャングァン）通りである。

蒼光通りの設計を担当していたある設計技師は、後日、首都の中心部にそびえ立った高層アパート群が、われわれの方式で生きるというのはどんなものであるかを人々に直観的に、生き生きとしたイメージを与えたところに蒼光通りの建設が持つ深い意味があると回想した。

社会主義大建設の陣頭に立って

新たな革命的大高揚を起こす闘いは、朝鮮の社会主義経済建設史上たぐいなく膨大な規模で進められた経済建設闘争であった。それゆえ、社会主義大建設を力強く推し進めるには、それに相応した新しい戦闘形式と活動展開原則が必要であった。

金正日総書記は、速度戦を社会主義建設の戦闘形式と活動展開原則であると見た。

もっとも、それ以前の朝鮮における社会主義建設もチョンリマを駆る勢いで進められた速度戦の歴史であったと言える。しかし、現実はそれまでの速度を陵駕するより速い速度を求めていた。

そこで総書記は、文学・芸術分野の指導に際して積んだ貴重な経験を生かして、速度戦を社会主義建設の基本的な戦闘方式として提示し、社会主義建設の全領域で速度戦を展開することを呼びかける戦闘的なスローガンを打ち出した。

総書記は、速度戦を展開して社会主義建設を最大限に推し進めるべく、思想革命と技術革命を力強く繰り広げ、そのための組織・指導活動を手落ちなく進めることなどについて具体的な課題とその遂行方途を明示した。

総書記の速度戦の展開方針にのっとって人民は「速度戦で前進しよう！」なるスローガンを合い言葉にして社会主義大建設に力強く取り組んだ。

ところが、1974年に原料・資材の不足、輸送の渋滞、その他あれこれの原因が重なり、9月が過ぎ10月に入っても年間計画遂行の見通しが立たない状態にあった。

10月初め、金日成主席は党中央委員会政治委員会で、年間計画の遂行が危ぶまれているとして、誰であれ打開策について考えていることがあれば、意見を述べてみるようにと言った。

この時、金正日総書記が立ち上がり、今経済担当幹部たちが非常に困惑しているようですが、わたしが一度党組織を動かして、経済問題を解決してみますと言った。

その数日後総書記は、党中央委員会と政務院の責任幹部並びに各道党委員会責任書記の協議会で、全党が奮起して「70日間戦闘」を強力に展開する課題を示した。

総書記は、採取工業と輸送問題及び輸出問題を「70日間戦闘」期間に解決すべき中心課題として捉え、その遂行作戦を周到綿密に立て、各部門に指導グループを送り込んだ。

「70日間戦闘」は、中央・道・市・郡の別なく10月21日に一斉に開始された。

「70日間戦闘」の勝利の鍵を人々の思想を動かすことに求めた

総書記は、各級党組織と幹部たちが思想戦を力強く繰り広げるようにした。こうして各道の芸能宣伝隊と芸術団それに宣伝カーまで総動員され、中央と地方の芸能人たちが生産現場で生産激励活動を力強く繰り広げた。

総書記は、総力を上げて炭鉱と鉱山を積極的に支援し、掘進と剥土を先立たせて一日当たりの生産量を最大限に増やし、それを正常化するよう指揮した。

他方、輸送のネックを解消すべく鉄道輸送に大きな力を振り向け、鉱石その他の原料の運搬に力を集中しうるよう輸送戦闘の対象を明確に定め、集中輸送・専門輸送を強めるための措置を講じ、貨車の修理用鋼材を優先的に生産・供給するようにした。

同時に輸出品の生産量を増やすとともに、その輸送が順調に進むよう対策を立て、さらに貿易港にクレーンを大々的に配備して港の通過能力を著しく高めるようにした。

総書記の執務室は文字通り「70日間戦闘」の総司令部であった。

当時、人々の間では「移動する執務室」「立体的に利用する時間」「歳月をたぐり寄せる縮時法」など新しい革命逸話が広く語られるようになった。

総書記の卓越した指導を得て「70日間戦闘」は勝利のうちに締めくくられ、その過程で新たなチョンリマ速度、「70日間戦闘」速度が生み出され、速度戦の新しい歴史が始まった。

「70日間戦闘」期間における生産は、それまでの実績に比べて平均1.7倍の増大を記録した。

総書記は、「70日間戦闘」で達成した成果を踏まえて、朝鮮労働党創立30周年記念日までに6カ年計画の主要目標を繰り上げて達成するための闘いを先頭に立って指揮した。

1975年1月の党中央委員会責任幹部会議で、金日成主席の新年の辞に応えて新たな戦闘を繰り広げ、同年10月10日までに年間人民経済計画を遂行し、6カ年計画の主要目標を繰り上げて達成することで党創立30周年を勝利者の大祝典として迎えようとの方針を提示し、その貫徹をめざす準備と組織・政治活動を手落ちなく行うよう具体的な対策を講じた。

当時、総書記が特別な関心を向けたのは農業部門であった。

江原（カンウォン）道のある農場を訪れた総書記は、植えて間もないトウモロコシ畑の中で幾株かの苗が倒れているのを見て、いちいち起こしてから、随行の幹部たちに、われわれは金日成主席の心労を和らげるために、一にも二にも農事に大きな力を入れなければならないとして、営農ではチュチェ農法の原則をしっかり守るのが重要だと強調した。

その後、チュチェ農法の講習会が行われ、チュチェ農法を貫くための活動がより着実に進められるようになった。

総書記は、農業の機械化・化学化を強力に推し進めるべく、トラクターと田植え機、稲収穫機の生産を増やして農村へ送るよう具体的な対策を講じ、1975年7月には興南（フンナム）肥料連合企業所を訪れて、肥料の増産に努めるよう労働者たちを励ました。

そうした中で田植えはその最適期に完了し、前年よりはるかに高く立てられた生産目標が達成された。

総書記は農業のみならず、工業部門でも前例をしのぐ成果が達成されるよう精力的に指導した。

6カ年計画を繰り上げて遂行する上でのかなめは依然として採掘工業であり、なかでも検徳（コムドク）鉱山はとりわけ重要な位置を占めていた。

総書記は殷栗（ウンリュル）鉱山の大型長距離ベルトコンベヤーの視察を終えると、引き続き非鉄金属鉱石の生産地検徳鉱山へ向かった。

随員たちの押しとどめるのを振り切り、粗末な身なりに安全帽をかぶった姿で坑内電車に乗った総書記は、主席が1961年4月5日に現地指導を行った4･5坑の切り羽に到着すると、石の粉でよごれた鉱夫たちの手をかまうことなく取り、彼らの生活や作業の状況についていちいち確かめた。

この日、総書記は鉱山の幹部たちと談話を行った席で、思想・技術・文化の3大革命を力強く繰り広げて生産で新たな高揚を起こし、人々の思想を改造し、技術を革新し、労働者階級の新しい文化を生み出す取り組みを強めなければならないと語った。続けて、大型長距離ベルトコンベヤー輸送ラインを設け、坑指令通信指揮システムを手落ちなく立てることなど、鉱石の生産で革命的転換を起こすための課題とその遂行方途を一つ一つ教えた。

総書記の現地指導に励まされた検徳鉱山の労働者たちは、鉱石の生産に力強く取り組み、6カ年計画の目標を1年半近く早めて達成し、その後、全国に先駆けて3大革命赤旗獲得運動ののろしを上げた。

朝鮮では社会主義大建設戦闘が力強く繰り広げられ、朝鮮労働党創立30周年まで6カ年計画の主要目標が繰り上げて達成された。

平壌を人民の首都、壮大華麗な都市に作り上げるのは総書記の遠大な構想であった。

1975年3月、総書記は主席から15年間ほど平壌市の建設を担当し、指揮するようにとの課題を与えられた。

その数日後、総書記は一幹部に、自分は平壌市の建設でも速度

戦を展開して奇跡を創造し、平壌の歴史にその繁栄期を記録することを決心した、その最初の市街は楽園（ラクウォン）通りとなり、最初の記念碑的建造物は万寿台芸術劇場になるであろう、主席が構想されている対象を含めて数十の記念碑的建造物を立ち上げたら、平壌は文字通り世界的な都市になるだろうと言った。

短い期間に平壌の繁栄期を現出させようと決心した総書記は、1975年3月、首都の建設で新たな転換を起こす雄大な計画を披露しながら、われわれは平壌市の建設で、人民を限りなく愛し、人民のためにすべてを尽くしている主席の気高い志と、主席を日と月が尽きるまで奉戴しようと志す人民の熱情がありのままに具現されるようにすべきだと強調した。

続けて、主席の高邁な志を違えることなく、平壌に人民のための住宅をはじめ公共建築、それに公園や遊園地をもっと多く建てることだが、さしあたり楽園通りの住宅を立派に建て、ついで環状線通りを改造すべきだと語った。

こうして、平壌市の姿を一新する大建設が始まった。

総書記は、首都の中心部に万寿台芸術劇場を芸術の殿堂として立派に建て、その周辺を首都の風格にふさわしく重みを持たせて整えるようにした。

こうして、万寿台芸術劇場が時代の記念碑的建造物として建てられ、その周辺の古い市街がすっかり取り払われて大噴水公園や緑地に変わった。

総書記は、首都の中心部にとどまらず、都市全体を壮大華麗によりよく模様変えすることに深い関心を向け、平壌の至る所に住宅や記念碑的な建造物を大々的に立ち上げるための建設事業を精力的に指導した。

総書記は、楽園洞一帯に新しい住宅街をつくって琵琶(ビパ)通りと真っすぐにつながる大通りを形成すべきだとした主席の構想にのっとり、朝鮮労働党創立30周年記念日まで楽園通りを立派に建設するようにした。

そして、楽園通りの各家庭にしつらえる家具類などの見本にいちいち目を通して、専門工場や各機関・企業が見本と同じ上質の家具類や仕上げ建材、衛生磁器類、金属建具類を適時に生産・提供するよう措置を講じた

このようにして楽園通りの建設が予定通り完了した。

楽園通りの建設についで、大記念碑的建造物を立ち上げる取り組みが活発に進められて、大城山(テソンサン)遊戯場の完成に続きヘルスセンター蒼光院と平壌産院が姿を現し、全人民学習の殿堂である人民大学習堂の建設が最終段階を迎えていた。

金正日総書記はその後、さらに多くの近代的な新市街を次々に立ち上げることで、平壌市を壮大華麗な都市に作り上げた。

4

創造と変革の日々に

1980年代は、朝鮮にとって創造と飛躍に輝く年代であった。

全国各地に記念碑的な創造物が立ち上げられ、社会主義建設の全分野で「80年代速度」の熱風が巻き起こり、飛躍と革新が止むことなく続いた。

この偉大な創造と飛躍は、無限の創造力とひとたび決心するとなんとしてもきっとやり抜かずにはおかない強力な実践力を備えた金正日総書記の非凡な指導力によって生み出されたのである。

総書記の透徹した自力更生についての思想と、人民の力に対する不動の信頼は、社会主義建設で驚くべき実りを生み、その非常な展開力は速度戦の熱風を巻き起こす原動力となった。

「80年代速度」の創造

金正日総書記は、1982年6月に開かれた党中央委員会責任幹部協議会で、1956年12月の党中央委員会総会を機にして大高揚を起こした時と同じように、社会主義経済建設で今一度新たな大高揚を起こそうと強調した。

その後、**「チョンリマ大高揚期の勢いで『80年代速度』を創造しよう！」**というスローガンを打ち出した。

1980年代社会主義経済建設展望目標の遂行で非鉄金属の生産が重要な対象とされていたが、その主力をなすのは検徳鉱山であった。この鉱山の生産力を決定的に伸ばすには、何よりも選鉱能力を高めることが必須であった。

検徳鉱山にはすでに1970年代に大型長距離ベルトコンベヤー輸送ラインの第1段階と第2段階の建設が完了し、坑設備の大型化・近代化・高速化が進められて、大量落鉱・大量運輸を実現する土台が確実に築かれていた。けれどもそれらに相応した選鉱能力が具備されていなかったので、鉱石の大量処理は実現していなかった。

1982年6月、金日成主席は現地で開かれた鉱業部門幹部協議会で、検徳鉱山第3選鉱場の建設を1年間でやり終えるようにとの課題を提起した。

総書記は主席の意図を違えることなく、検徳鉱山で「80年代速度」のモデルを作り上げようと決心した。

工事を開始するに先立ち、建設の担当幹部たちは既存の工法に照らして工事の期日を概算してみた。設計が何カ月、建物の基礎工事と築造がいくら、設備の製作と運搬・組み立てが何カ月、配管工事と配電工事がどれほど……。そのような工事をリレー式に行っていれば、一体決められた期日内に選鉱場がどう日の目を見ることができようかとしてみな困惑していた。

この報告を受けた総書記は、そのような既存の工法にこだわるべきではない、一切の工程を同時に進める立体戦を展開することだと教えた。

この立体戦は、総書記がすでに幾つかの建設に適用して成功していたすぐれた工法、新たな速度戦の方式であった。

この立体的建設工法に従って、工事の全工程はほぼ同時に開始された。

総書記はこの工事に実務に長けた有能な幹部たちを投入して強力な指揮部を組み、毎日のように工事の進行状況報告を聞き、解

決が待たれる緊急な問題が生じると、即座に解決方途を立てた。

工事が本格化していた9月、総書記は砕鉱舎の建設工事に難問題が生じたとの報告を受けた。

総書記は、砕鉱舎はどんなことがあっても寒くなる前に完成しなければならないと言った。報告者は道内の労働力を補充して寒くなる前に工事を終えるという意見を述べたが、総書記はしばらく考えてから、それも一策だが、労働力を集めるにはかなりの時間がかかるだろうからそうはしていられない、だから速度戦青年突撃隊を送ることにしようと言った。そうしたら10月末まで２カ月しか残っていないが、建物の組み立てを終えることができるだろうかと聞いた。

そうしていただけたらなんとしても突貫工事をもってやり遂げますと、報告者は答えた。ところが、総書記はまた考えてからかぶりを振り、この工事はただやみくもに督励するだけで順調にはかどるものではない、だからもう少し一緒に解決策を考えてみようと言って、しばらく思いにふけった。

報告者が技術的に万全を期しながら組み立てを早く進めるには、大型クレーンと熟練した組み立て工が今少し多くなければならないようですと言った。

「クレーン、組み立て工……」と口ずさんでいた総書記が確信ありげに、砕鉱舎をスリップフォーム式で建設しようと言った。

この思いがけない言葉に驚いている報告者の顔を見つめていた総書記は、その気になって取り組めば不可能なことなどあり得ない、大胆に考えて乗り出せば砕鉱舎はおろか、それ以上の建物でもスリップフォーム式で立ち上げることができるだろうと言った。

工事の難問題はこうして解決されたのであった。

総書記のこの深い配慮と指導を得て、常識では到底不可能と思われていた1年という期限内に検徳鉱山の第3選鉱場の建設は完了し得たのである。

1983年8月、金日成主席は朝早く恩龍（ウンリョン）台地に立った。

天空を支えているかのように高々と立つ砕鉱舎と破砕・篩い分け場、大規模浮選場、大型長距離ベルトコンベヤー輸送ライン、それに選鉱場のそれぞれの建物内に設けられた近代的な特大型・大型設備……。

選鉱場区域を見渡していた主席は、第3選鉱場をわずか1年間で立ち上げたのはそれこそ奇跡だ、検徳鉱業連合企業所第3選鉱場は「80年代速度」創造運動の偉大な産物であると、誇り高く宣言した。続けて、大規模選鉱場を1年という短期間に立ち上げたのはわが党の威力、工業強国の威力を力強く誇示したことになる、これこそほかならぬ「80年代速度」であり、このような速度で前進すれば、社会主義経済建設の10大展望目標も十分に期間を早めて達成されるだろうと、確信に満ちて言った。

自力更生の信念を植えつけて

1980年代に至り、朝鮮では大型酸素分離機の製作が緊要な問題として持ち上がった。

大型酸素分離機は一つの大工場に匹敵する総合設備で、これを作るにはおびただしい近代的設備と最新科学技術を導入しなければならない。

しかし実際に製作に取りかかってみると、難題は一つや二つで

なかった。なかでも最大の難題は大型酸素分離機の心臓部設備に使う製品を作ることだが、その技術は世界の幾つかの先進国のみが専有しているものであった。

この難問題をもって連日意見を戦わせたが、今なお解決策を立てるに至っていなかった。そんな中で一部の人たちは、これだけはどうにもしようがないから、その重要部品を外国から買ってこようと言い出す始末であった。

そうした事情についての報告を受けた総書記は、単なる一つの工作機械を作るにしてもいろいろな困難に遭遇するが、現代工業の精華と言える大型酸素分離機がそうたやすく作れるはずはなかろうと言って立ち上がり、室内を行ったり来たりしながら考え続けた。

やがて歩みを止めた総書記は、力をこめて言った。

問題は、われわれがなんとしても自力で必ず作らなければならず、またきっと作り出せるという確信と勇気を持って頑強に取り組むことだ、そうならば、大型酸素分離機の重要設備も自力で作れるし、またそのロット生産もわれわれの力と技術をもって進めることができると。

総書記は、自分も大型酸素分離機の製作問題について深く考えてみたとして、その間研究した先進国の酸素分離機の製作方法について説明した。その後、楽元機械連合企業所の支配人を呼んで、技術者たちの知恵と力を合わせて酸素分離機の心臓部の秘密を必ず自力で解明しなければならないということと、決心して取り組めば神秘なものなどはなく、不可能なこともないということを彼らに言って聞かせて確信を抱かせるようにすることだと強調した。

そのしばらく後、楽元の労働者たちは、今一つの感激的な話を伝え聞いた。

同年6月、歴史的な外国訪問を行った総書記に随行した一幹部が帰国後、楽元機械連合企業所へやって来て次のような話をした。

ある日、訪問日程にある参観地へ向かうことになった時、出発を前にして総書記はその幹部に次のようなことを言った。

酸素分離機をわれわれの力で作ることを決心したのは全く正しいことだった、チュチェ朝鮮の威力を誇示すべく創造し建設するわれわれの根本的な立場は、すべてのことを自力で解決することだ、これがわれわれの進むべき唯一の道なのだ、と。

続けて総書記は、大型酸素分離機の心臓部をなす重要部品を作る幾つかの方法について話した。

総書記は外国の訪問中もこの問題を考え続け、解決方途を研究していたのである。

その感激的な話を聞いて製作者たちはみな、なんとしても大型酸素分離機を自分たちの力で作らずにはおかないとの決意を新たにした。

意気軒高した楽元の労働者たちは、大型酸素分離機の製作に力強く取り組んだ。けれども道は容易に開かれなかった。失敗はあとからあとへと続いた。

総書記は、これまで楽元の労働者たちは主席からこれ以上に困難な課題を受けても常に自力でやってのけた、党から与えられた任務とあらばなんとしても最後までやり遂げずにはおかないその不屈の闘志と気迫をもって取り組めば、大型酸素分離機はきっと作られるだろうと励ました。

これに力を得た楽元の労働者と技術者は、そんなにも難しく苦労させられた技術的問題を一つひとつ解明し、ついに大型酸素分離機を作り上げる確実なめどをつけた。

その報告を受けた総書記は、1984年10月、現地を訪れた。

「酸素分離機の製作がどう進められているかを確かめたくて参りました」

楽元の幹部たちと挨拶を交わして総書記は尋ねた。

「ところで生産物は出来上がりましたか」

「はい、ほぼ完成段階にあります」

「ほぼ完成段階ですか……」

こう反問した総書記は、初め半分と言うが、完成段階ならばすっかり出来上がったも同然ですねと言って愉快に笑い、大型酸素分離機の設備のうち、この工場が独自に作っているのはどれほどかと尋ねた。

「幾つかの連携生産設備を除いて、一切当工場で独自に製作しています」

総書記はその返答を聞いて、そんなに多い設備をみなここで製作しているのですかとして感嘆した。

やがて総書記は工場幹部の案内で、一部の国の人たちが「秘密」だとして自慢している大型酸素分離機の心臓部設備に使う製品の前へ歩みを移した。

機械に注意深い目をこらし、その優秀性についての説明を聞いた総書記はたいそう満足して、工場労働者たちの労をねぎらった。

「たいしたものだ。実にただ見ただけでも精密そのものだ。こんな物までみな自分たちの手で作ったと言うのですね」

総書記は機械を稼働させて眺めながら大満足し、**「まったく皆さんを信じて止まなかった甲斐がある、甲斐がね。大変なものだ。なんとも大変なものだ」**と繰り返したたえた。

総書記は、一度として分解してみたことのない大型酸素分離機を皆さんがこんなにも精密な機械を作り上げたのは実にすばらしいことです、これは、わが国の工業の威力を改めて誇示した一大革命です、と誇らしげにたたえた。

随行の幹部たちが、自分たちは工場が今なお技術的問題をかなりかかえているものと考えていましたと率直に総書記に言った。

これに対して総書記は、一部の人たちは楽元の労働者たちの自力更生の力を信じていなかったが、このように独力で酸素分離機を作り上げた、以前、戦災で焼野原と化した状況の中でも手榴弾や揚水機を作り、今は白紙に等しい状態で酸素分離機を自力で作り上げた楽元の労働者たちの自力更生、刻苦奮闘の革命精神と模範を全国が見習わなければならないと力をこめて言った。

1985年10月、朝鮮労働党創立40周年記念日を迎えて、ついに大型酸素分離機第1号が完成した。

国の機械工業の発展上今一つの革命だと言える大型酸素分離機、これは総書記の自力更生に対する信念によって生み出された1980年代の今一つの偉大な創造物である。

金正日総書記は1970年代についで1980年代にも、このようにわれわれの歩む道はひとえに自力更生、刻苦奮闘の道であるという鉄石の信念のもとに国の社会主義経済建設を全力を傾けて指導したのであった。

固い信頼

1984年5月中旬のある日。

金正日総書記は、朝鮮東海岸を走っている列車内でずっとある一つの問題を考えていた。

数日前、金策(キムチェク)製鉄所を視察した際、圧延鋼材の生産に必要な重要部品の補給がとどこおりがちで、生産に支障をきたしている事実を知った。

その部品を作るには1万トンプレスがなくてはならないが、朝鮮にはまだそれがないため、部品を輸入に頼るほかないと主張する人たちがいた。

なんとしても1万トンプレスを自作しなければならないと決心した総書記は、その方策について考え続けていたのである。

総書記は、竜城の労働者たちに思いを馳せた。

総書記は、彼らに呼びかければ、必ずや1万トンプレスを作り上げるだろうと確信した。それは実際の体験によるものだった。

竜城の労働者は1960年代に6000トンプレスの製作にこぞって取り組み、当時としては力に余ることだったが、あらゆる難関を克服してわずか1年で立派に作り上げたのである。

総書記は列車を降りるとその足で、竜城機械連合企業所のプレス職場を訪れた。

前触れもなしに不意に訪れた総書記を迎えた工場の幹部たちは、訳も知らずに喜んだ。

大きな鋼塊を飴の固まりを押しつぶすかのように加工している

3000トンプレスの作業ぶりを眺めていた総書記は質問した。

「今圧縮しているのは何に使う素材ですか」

「6000トンプレス用の素材です」

工場の幹部は総書記が不意にやって来た理由を知るよしもなく、今工場ではさらに6000トンプレスを2台作ることにしていますと、誇らしげに言い足した。

何かをちょっと考えていた総書記は、むろん6000トンプレスをさらに作ることも重要だが、今日われわれが皆さんに会いに来たのは、そのことを知りたかったのではないとして、こう言った。

「これまでは6000トンプレスが必要でしたが、今は1万トンプレスが必要になったのです。そのように大きなプレスを作ることは国の経済力を評価する目安となります」

この時になって総書記が自分たちの工場へやって来た訳を知った工場の幹部たちは、あまりにも意外な、膨大極まる課題に驚いた。

そんな彼らを見ながら総書記は単刀直入に聞いた。

「どうです。竜城機械連合企業所は1万トンプレスを作れますか」

「親愛なる指導者同志、われわれ竜城の労働者たちは1万トンプレスをきっと作り上げます」

工場幹部のいささかのためらいもない自信に満ちた返答を聞いた随員たちは唖然とした。この困難極まる課題をそんなにも安請け合いできるものだろうかと考えたのである。

総書記はそう答えるものと予想していたかのように、信頼と確信に満ちた口調で言った。

「きっと作ることです。来年は党創立40周年に当たる年ですか

ら、それを機会として1万トンプレスを党への贈り物として作るのです」

この言葉に随員たちは二度びっくりした。

当時、1万トンプレスを作っている国はごくわずかしかなかった。

それに党創立40周年記念日までは1年余しか残されていないのである。そんなにも短い期間に一体そのように巨大なプレスを作れるはずがあろうか。万が一それに成功したとすれば奇跡中の奇跡である。

けれども総書記は、その奇跡は確実に起こると確信して竜城機械連合企業所へやって来たのであった。

「1万トンプレスをきっと作るのです。作ればそれこそすばらしいというものです」

こう言って総書記は、1万トンプレスの製作に関するいろいろな問題について工場の幹部たちと意見を交わした。

工場を後にする時総書記は、工場の幹部たちに向けてこぶしを握り、大きな信頼をこめて言った。

「竜城機械連合企業所は有力な企業です」

総書記の大いなる信頼は奇跡を起こした。

工場は、朝鮮労働党創立40周年記念日の10月10日を前にして1万トンプレスの組み立てを終え、試運転も無事に済ませた。これに要した時日は1年3カ月であった。

1986年3月のある日、総書記は竜城機械連合企業所を訪れた。

総書記を迎えて大喜びした工場の責任幹部は涙声で言った。

「親愛なる指導者同志、1万トンプレスはすぐにも降仙へ運び出して設置することになっているのですから、その時にご覧になれば良いのです。それをどうしてこんな遠くへお出でになられたのです」

総書記は、そうしたら楽なことは無論でしょうが、われわれが竜城の労働者たちに信をおいて課題を与えた結果作られた1万トンプレスですのに、それを作り上げた労働者たちに会いもしないでどう降仙に送ることができましょうかと言った。そして1万トンプレスの前へ行き、ここでまず、その製作に参加した労働者や技術者たちに会い、一人ひとりの手を取ったあと、こう言った。

竜城機械連合企業所の労働者たちが自力更生して作った1万トンプレスを新聞の写真だけを見て済ませるわけにもいかず、チョンリマ製鋼連合企業所に設置してからそこで見ると、竜城の労働者たちがなんと考えるだろうと思って、今日時間を割いて訪ねて来ました。

そのあと1万トンプレスを満足げに眺めながら言った。

1万トンプレスは写真で見た以上にずっとすごい。……1万トンプレスは、われわれの時代の記念碑的な創造物です。竜城機械連合企業所が立派なことを成し遂げました。

卓絶した組織的手腕

西海（ソヘ）閘門は、大同江河口の外海に8キロメートルの長さをもって5年間で構築された閘門である。

この海上の巨大な構造物には、人民を信じ、その力を積極的に引き出して建設を非常な速さで進めた金正日総書記の非凡な指導力がこもっている。

1983年4月、南浦（ナンポ）港を出発した1隻の船が朝鮮西海に向けて進んでいた。へさきには、海風に衣服のすそをはためかせなが

ら、金正日総書記が深い想念に沈んで立っていた。
　西海閘門の建設を陣頭に立って指揮していた総書記は、工事中に難問が持ち上がったという報告を受けて現地へ向かっていたのである。
　当時世界のメディアは、朝鮮という大きくもない国が果たしてその膨大な閘門の建設を果たしうるだろうか、たとえ完成しうるとしても、短期間に完成目標を実現することは到底不可能だと評していた。
　けれども総書記は、われわれはなんとしても閘門を建設しなければならず、必ずや建設せずにはおかないと固く決心していた。
　現地に到着した総書記は、海中に伸びつつある仮締切り堰堤の上に立って、仮締切りの工事場や基本ダムの建設場、それに遠くの部材の生産場など、工事場の全般を見渡した。
　総書記は、軍人たちが大きな成果を上げているとしてたたえた後、担当幹部たちから重要建設対象別の労力配置状況と今後進める仮締切りと越流ダム、閘室の工事量についての報告を聞いた。
　総書記は、閘門建設の作業の手配と指揮に問題があるようだ、わたしの考えでは、主要攻略目標が定かでないと思う、と言った。
　続けて、閘門建設についての報告を受けるたびに、そこには基本ダムの工事をどれだけ行ったということだけが述べられているので、一度出かけてみる必要があると考えてやって来たが、やはり思った通りだったとして、工事の主要打撃方向について明確な結論を下した。
　南浦閘門の建設では仮締切り工事と排水、閘室、越流ダムの工事が基本をなしています。
　けれども今は仮締切り工事が基本です。仮締切り工事が完了し

さえすれば、閘室の工事も越流ダムの工事も容易に進めうるではありませんか。
　ですから仮締切り工事を主要攻略目標として、これに総力を集中すべきです。
　総書記は、そうすれば立体戦、全面戦を展開しうるのだと強調した。
　総書記は、たとえ軍人建設者たちの気勢が高く、目の前の工事で成果を上げているにしても、工事の手配と指揮に手落ちがあれば、全般的工事に取り返しのつかない重大な結果を招くことになる、今からでも工事の手配をやり直して、主要攻略目標に力を集中することだと言った。
　この時、一幹部が、論議がふんぷんとしている仮締切り工事で持ち上がっている工法問題について報告した。
　説明を受けた総書記は、新工法を認めようとしない人たちは水圧の計算結果を根拠にして反対しているそうだが、では新工法を主張している人たちの根拠は何かと聞いた。
　「その間科学者たちと協議し、水利工学実験も行いましたし、規模は小さいものでしたが、以前人民軍部隊がその方法で工事を行った経験もあります」
　「それなら根拠は十分じゃありませんか」
　総書記は、自分が今日ここへやって来た主な目的の一つが新工法の導入問題をどう解決すべきかを考えてみようとしたことだったとして、こう語った。
　われわれはあくまでも科学を信じなければなりません。水利工学実験を行い、小規模ながらもそのような方法で仮締切りを行った経験もあるからには、何を恐れて尻込みする必要があるのです。

総書記は続けて、経験と水利工学実験が証明しているのだから仮締切り堰堤は崩壊しない、水圧の計算を今一度行ってみると良い、けれどもそのために工事を延ばすことなく、動揺せず新工法によって仮締切り工事を推し進めるべきだ、自分は新工法を支持する、と確信に満ちて言った。

総書記は確信と勇気が湧いて心をはずませている幹部たちの興奮した様子を見やりながら、言葉を続けた。

今臆病な人たちは仮締切り堰堤が崩れてはとして恐れているが、仮締切りが出来上がれば、その広い土手の内部でこれ見よがしに軍人たちのサッカーの試合を大きく行うことにしよう……。

総書記はその日を目の前に描き見ているかのように豪快に笑った。

その後1年足らずの間に仮締切り堰堤は完全に出来上がり、排水もきれいになされた内部の床の上で、軍人建設者たちは頭上に波の音を聞きながらサッカー試合に興じた。

建設者たちは、主要攻略目標を極めたその気勢をゆるめることなく、次の段階の工事に取り組んだ。

1984年4月、総書記は再び西海閘門建設場を訪れた。

この日、建設者たちが上げた成果を大いにたたえて彼らを激励した総書記は、今や閘門の建設を早く完成しうるとの確信が生じたとして大きな満足を表し、次の段階の目標とその遂行に必要な問題について確認した上で、必要な対策を立てた。

総書記が講じた決定的な措置により、建設の速さは非常に高まった。

ところが、工事の速度が急激な速まりを見せると、2、3カ月後には必要な資材と設備の供給が建設速度に追いつけなくなった。

そんなある日、こうした事情を電話で知らされた総書記は、次のように語った。

閘門の建設場に資材と設備を補給するのは、戦時に1211高地に砲や砲弾を送っていたことと何も違ったところはありません。あの苦しみに満ちた戦争のさなかにも戦う高地に砲弾・弾薬を切らさずに送り続けたのに、今日の状況で閘門の建設場に資材と設備を適時に送ることができないなどというのは話になりません。革命的な対策を講じなければなりません。

閘門の建設者たちに、資材と設備はわたしが責任をもって確保するから、建設速度を落とさず引き続き推し進めるよう伝えてください。

その後、総書記はただちに政務院の責任幹部を呼び、西海閘門の建設状況を知らせ、政務院（当時）の委員会と部及び各道の関連部門の工場・企業の責任幹部協議会を行うようにと指示した。

その幹部は、協議会を準備し、全国各地の地方幹部たちを呼び集めるには一定の時間をかけなければとして、数日後に平壌で会議を開き、対策を立てると答えた。

総書記は、彼が事態の重要性を認識できず、のんきなことを言っているとして、今人民軍の兵士たちやその他の建設者たちは、銃砲声はないにしても、海の荒波と戦い、一歩一歩ダムを築きながら力に余る突貫作業に取り組んでいる、今は一日として無駄は許されない、緊急指示をもって明日の朝、協議会を開くことにし、それも平壌ではなく西海閘門の建設場で開くことだ、そして会議の参加者が到着したら、会議に先立ち、建設場の参観を行うよう手配することだと言った。

翌日、西海閘門の建設場では、緊急に呼び出された中央と全国

の関係幹部たちの参観と協議会が行われた。

恐ろしい荒波と戦う軍人たちの英雄的な闘争ぶりを目撃した彼らの感動と衝撃は実に大きかった。

「わが目でじかに確かめたのだから会議を長くする必要なない」

彼らは口を揃えてこう言い、自分たちに任せられた資材と設備は無条件、最優先して送って寄こすとの決意を固めた。

その後建設場には、全国各地の工場・企業から必要な資材や設備が次々に到着して建設の速度がいっそう高まり、ついに最終の段階を迎えた。

1985年9月、総書記は最後の闘いを繰り広げている建設場を訪れた。

当時、建設場ではダムの最後の仕上げ工事で苦労していた。

ダムの最後のつなぎ合わせの間隔が狭くなり、そのため水流の勢いが激しいので、巨石を投入しても海底に達しもせずに押し流されてしまうのである。

総書記は現地で、即座にその解決方法を教えた。それは、閘門の建設をつつがなく締めくくる上で決定的な役割を果たせるようにした名案であった。

その7カ月後の1986年4月、建設者たちはダムの仕上げ工事を終え、西海閘門の建設を締めくくった。

古い昔から海へのみ流れていた大同江の水は、ここでいったん流れを止めて閘門の内側に大人工湖をつくり、それまで海をはさんで離れていた南浦市と殷栗郡は巨大なダムによって結びついた。

これは、世界の水利専門家がその可能性にかぶりを振っていた、文字通り奇跡にも等しい大変革であった。

速度戦の実り

より高く、より早く前進しようという金正日総書記の速度戦の指導方式は、下記の幾つかの事実からしてもよく理解できるだろう。

金日成主席が金策製鉄連合企業所の溶鉱炉の大補修問題を提示した時、この工事を速度戦をもって短時日に終えると決心した総書記は、1986年1月、党中央委員会の一幹部を呼び、鉄鋼材の生産を伸ばすべく、金策製鉄連合企業所第1号溶鉱炉の大補修を早く終えるようにと指示した。

翌日、再び電話で彼に、第1号溶鉱炉補修問題を強調して、厳冬の今から第1溶鉱炉の大補修と焼結炉の拡張工事を強力に推し進めて、花咲く4月15日、主席の誕生日に赤い鉄湯が勢い良く流れ出すようにしようと言った。

直ちに彼を現地に送り出した総書記は、その後、長距離電話で工事の進捗状況を確かめては、具体的な工法についての助言をした。

その頃、あれこれと考えながら勇断を下せないでいた工場の幹部たちは、やっと第1号溶鉱炉の火を消して解体作業を開始した。

その報告を受けた総書記は、工事を始めたのは第一歩を踏み出したに過ぎない、問題は対象設備と資材をいかに早く確保するかによりすべてが決定されるとして、金策製鉄連合企業所第1号溶鉱炉の補修と焼結炉の拡張工事に必要な対象設備と資材を最優先して送るよう関連工場・企業に指示した。

総書記は、溶鉱炉の解体後、築造を始めるのではなく、今回は一方で溶鉱炉を解体し、他方では新しい溶鉱炉の築造を同時に進

めることだと教えた。

国の各地から生産された対象設備が列車によって続々と送り込まれ、溶鉱炉の解体、設備の製作と運搬、組み立てがわずか65日間で完了した。

こうして当年4月15日、大きく改築された第1号溶鉱炉からは赤色の鉄湯が勢いよく流れ出した。

またこのような話もある。

1988年5月、民族料理レストラン玉流(オンリュ)館に総書記がやって来てはこう言った。

「玉流館を現代的に立派に増築しなければなりません。

最近、金日成主席が船に乗って大同江を下りながら玉流館をご覧になり、玉流館も今では小さく見え、片腕のない人のように均衡が取れていないとして、玉流館を増築するようにと言われました」

総書記は、すぐに工事を始め、電撃戦の方法でやり終えるべきだとして、以前、金日成競技場の拡張工事も3カ月間でやってのけたのだから、玉流館の増築は2カ月もあれば十分にやれるだろうと言った。

総書記は、共和国創建記念日9月9日を機に全国英雄大会を盛大に開くことが計画されているが、増築工事をそれまでに終えないと困るとして、**「どうです、それまでにやり終えることができますか」**と聞いた。

そこに居合わせていた一幹部は、これまで総書記の指導の下で多くの建設を行う中で、総書記がいったん決心すると常にきっとやってのけるということを常日頃体験していたので、きっぱりと答えた。

「資材さえあればやれます」

総書記は微笑んで言った。

「資材の問題は心配しなくてもよろしい」

そして建設敷地を見て歩きながら、直ちに始める増築に関する電撃戦の作戦計画を立てた。

こうして玉流館の増築工事は開始された。

20日にして壁が築造され、6月末には屋根の工事が完了し、複雑な内部工事と設備の組み立てもそのような勢いでまたたく間にやり遂げた。

増築工事は計画通り2カ月間で立派に完了した。

同年9月、増築なった玉流館を訪れた総書記は、満足した語調で言った。

「これまで建設は少なからず行ったが、建物の質を高めながらもこんなにまで早く建てたのは、今度がはじめてです」

そして、容易でないこの工事を2カ月で仕上げたと聞いたら、まさかと思う人たちもいるでしょうと言って豪快に笑った。

総書記の速度戦に関する思想は、社会主義建設の全分野で巨大な勝利を達成する原動力となった。

1988年2月、総書記は一幹部を呼んでこう言った。

われわれは今年、なんとしても社会主義建設の全分野で今一度戦闘を繰り広げて第3次7カ年計画遂行の突破口を開かなければならず、共和国創建40周年を勝利者の大祝典として輝かさなければなりません。

これは主席の決心であり、わたしの決心です。

その数日後に開かれた党中央委員会政治局会議では、「200日間戦闘」を繰り広げることについての党中央委員会の決定と、共

和国創建40周年を迎えて全党員に送る党中央委員会の手紙とスローガンが採択された。

「200日間戦闘」は、朝鮮における40年間の社会主義建設史上前例のない大経済建設戦闘であった。それまで「70日間戦闘」と「100日間戦闘」を行った経験はあったが、「200日間戦闘」はその期間と規模からしても、また遂行すべき課題においても、従前の戦闘とは比較すらできないほど膨大であるために、最初からしっかりと取り組まないでは、所期の目標の達成は及びもつかないのである。

総書記は、党中央委員会の手紙とスローガンに対する全党的な討議を進めることで、すべての党員を奮起させる一方、直ちに党活動家による強力な指導グループを組んで全国各地に送るようはからった。

このようにして「200日間戦闘」が開始されると、総書記は自らも現地指導を続けながら戦闘を指揮し、その間、工場や建設現場など数多くの単位を休むことなく訪れた。

総書記の疲れを知らぬ精力的な指導を得て、「200日間戦闘」は輝かしい勝利をもって終了した。

「200日間戦闘」が上げた輝かしい成果に関して、朝鮮中央通信は次のように報じた。

戦闘期間、工業生産は前年と同じ期間に比べて122パーセントに成長、数百の工場・企業が年間計画を繰り上げて超過遂行、主要攻略部門の基本建設において共和国の創建以降最高実績を記録、全般的な人民経済建設で本年度の計画と第3次7カ年計画を繰り上げて完遂しうる強固な前提が確立……。

このように金正日総書記は、1980年代、社会主義建設の全般を指導する過程で卓抜した指導力を遺憾なく発揮した。

5

興隆の飛躍台を築くために

1990年代に入り、朝鮮は国家の存亡にかかわる巨大な嵐に襲われた。

ソ連と東欧諸国における社会主義の挫折という大事変に便乗した帝国主義勢力の反社会主義強風が吹きすさび、かてて加えて、1994年7月、民族の父金日成主席の急逝という出来事が生じた。のみならず数次にわたる酷い自然災害、敵対勢力の執拗な封鎖などにより、朝鮮は大きな苦境に追いやられた。

敵対勢力が、朝鮮は長くは持ちこたえることができないだろうという「崩壊説」を云々してはやし立てていたのがほかならぬこの時期であった。

しかし、朝鮮は先軍政治の力をもってこの一大試練を乗り越えた。

その闘いは、血と汗ひいては生命の犠牲をも伴う悲惨なものであったが、朝鮮人民は自主的尊厳を守りぬき、その間、貴重な経験を得て、社会主義強国建設の飛躍台を築き上げた。

金正日総書記が歩んだ先軍の途上では、一碗の粥で腹を充たして工場を訪れたこともあれば、うたた寝こそ何よりも気持ちが良いとして笑い、車内で夜明けを迎えたこともあり、キャンプ生活に向かう少年少女を恋しげに見送りながら野戦車を走らせて前線の視察に向かったこともあった。

総書記のうむことなく歩んだ先軍の道があったがゆえに、朝鮮人民はついに「苦難の行軍」、強行軍を勝利をもって締めくくることができた。

総書記は、先軍をもって守った祖国の大地に人民の楽園を立ち上げるべく、わが生涯をろうそくの灯のように燃やし続けた。

総書記の献身的な労苦が報われて、この地に経済建設の活性化と人民の生活の向上を図る新しい種が芽生えて、富強な朝鮮の夜明けが始まったのである。

祖国の運命を双肩にになう

1960年8月に始まった金正日総書記の革命武力への指導は、1990年代の中頃に至って新たな段階で進められた。

当時は、国の歴史上重大極まる試練に直面し、国と人民の運命を救うために厳重な政治的決断を下さざるを得ない時であった。

当面した経済建設と人民の生活上の困難を打開するための経済先行の道を選ぶべきか、それとも敵対勢力の挑戦から国の自主的な尊厳を守るために軍事を重視する道を選ぶべきか、これが当時、時代と革命が朝鮮に提起した質問である。

ところで、いかなる国であれ、強力な軍事力なくしては自国の運命を守ることはできないのである。それゆえ、朝鮮が選ぶべき道も自主的な尊厳を守る道であることは明白であった。

とはいえ、それを国策として定め、実行に移すのは、当時の国情からすれば血涙を絞って下さなければならない大勇断と言わざるを得なかった。実際、この勇断を下せば、人民の生活上の苦しみは当面和らぐはずはないのである。

1994年7月、民族の父金日成主席の急逝に驚愕して悲嘆に暮れ、大国喪の痛みから立ち直る間もあらず、次々に襲いかかる暴雨や大日照り、台風や津波などまれに見る天災の継続、かてて加えて敵対勢力の厳しい経済封鎖と窒息政策が度を超して、人民の

経済生活は悪化するばかりであった。

敵対勢力は、ソ連と東欧諸国の社会主義が崩壊して社会主義市場が消滅した機に乗じて、経済的孤立と封じ込めの輪を2重、3重に巡らして何としても朝鮮を圧殺せんものと狂奔した。

ひどい食糧難・燃料難・動力難・原料難が重なって朝鮮はあえいだ。

これらの困難を克服し、国の運命を救うにはどうすべきか、総書記は、わが責任でこの難関を克服すべく思索に思索を重ねた。

今日は苦しくてもこの苦しみに耐えたら明日は必ずや幸福な生活が保障されると確信して、総書記は決然として軍事をすべてに先行させる道を選んだ。

この時から十数年を数える総書記の革命指導の歴史には、朝鮮革命の前途を阻む厳しい試練を克服して祖国と社会主義を固く守り、社会主義強国の明るい未来を拓いた先軍長征の巨大な足跡が刻まれたのであった。

1994年12月31日の日暮れ時、平壌郊外のある射撃場で雷鳴を思わせる銃声が鳴り響いた。

この銃声を響かせた後、金正日総書記は錦繡山(クムスサン)記念宮殿で金日成主席に敬意を表し、新年正月元旦、小松林の陣地に対する歴史的な視察を行った。

総書記は、帝国主義連合勢力に正面から対抗している状況にあって、人民軍に依拠せずには国と民族、社会主義を守れない、国が存在していれば経済を立て直すのは別して問題にならないが、銃の力が弱くて奴隷になれば、党も国家も人民も存在しえず、すべてがあぶくとなって消え失せる、先軍こそが不敗にして百勝を

遂げる道であるとの信念と意志をもって国防力の強化に全力を傾けた。

先軍の道は決して坦々たる大路ではなかった。

その過程ではこのような話もあった。

国の軍事力の強化に支出すべく計上された巨額の国防予算案にサインするためにペンを取った総書記は、人民が非常に苦しい境遇にある時このような決心を下すほかないのだから、どうにもやり切れない、わたしはこんな時が一番心苦しい、けれども今に決定的な凱歌をあげる時、人民にすべてを打ち明けよう、そうしたら人民は、どうしてそんな苦しみをなめなければならなかったかをはっきり理解するだろうと言った。

首都平壌から遠く離れた最前線地域にある、それまで世間にあまり知られていなかった山の鉄(チョル)嶺が、祖国の運命を救うべく前線の険しい道を歩き続けた総書記の不滅の足跡をいつまでも伝える歴史の証言者として広く知られるようになった。

最前線を訪ねて鉄嶺を越えた1996年3月のあの日から、総書記は鉄嶺を何度越えたことだろう。真夏の熱風に吹かれながらも越え、雨や雪に打たれながらも越え、夜中も早朝も越えた。

その道で、祖国の運命を守る国防力強化の戦略を考究し、思索に思索を重ね、積もりに積もった疲労でうとうと眠りに落ちても、すぐに目を覚ますのが日常であった。

……わたしも鉄嶺が険しい危険な道であることは百も承知している。峠の道を登りながらちょっとでも油断したら深い岸の下へ転落するということも分からぬ訳ではない。にもかかわらずしょっちゅう鉄嶺を上り下りするのは、鉄嶺の向こうに愛する兵士たちが最高司令官が来るのを待ちながら祖国の防衛線を

守っているからだ。彼らが凍土にうつぶして敵陣に目を凝らしながら夜を明かす時何を考えていると思う。彼らはこの最高司令官に思いを馳せ、全身が凍える寒さも、また全身がゆだり、ぐったりする暑さも耐え忍んで最前線の陣地を鉄壁の如く守っている。

だから、わたしがどうして彼らをしょっちゅう訪ねず、のうのうとしていられようか。絶対にそうはしていられない。……

わが子たちのことが気がかりで訪ねていく実の親の道であるがゆえに、総書記がこの険しい鉄嶺をこれから先どれほど越えることになるかは、当時誰も推し量ることができなかった。

先軍長征のシンボルとして今は人々に広く知られている五聖山（オソン）は、前方に敵の重兵器をはじめ各種の戦闘技術機材が集中しているために瞬間として気を許せない軍事的な危険地帯である。

五聖山は軍事的にだけ危険な地帯ではない。朝鮮の最前線の高地の中でも、高さも険しさも指折りの山で、傾斜の急な山腹の道や崖道を通って頂上まで登るには150余もの曲がり角を通り続けなければならない。

1998年8月のある日、連日降り続けた雨に濡れてぬかるんだ峠道をたどって、総書記は五聖山陣地の視察に向かっていた。

まかり間違えば千尋の谷へ転落する恐れのある五聖山の峠道を進む前線視察の道、ずり落ちると上がり直し、車輪が横にずれてあわや転落かと思わず冷や汗をかくことも何度だったろう。

随員がもはや登るのは困難ですと言うと、総書記は、軍人たちがいるにもかかわらず、ここまで来てわたしが高地へ行くのを断念したらどうなる、最高司令官が今日のような悪天候の日に前線のこのようなひどい峠道を登ってみれば、わが兵士たちの生活に

ついてより良く理解しうるのだと言い、早く行こうと随員たちを催促した。

こうして再び前進を始めた野戦車が、また泥に足を取られてちょっと回転したかと思うと、後ろへずり下りはじめた。あわやというこの瞬間、いち早く飛び降りて車体に肩を当てたのは総書記であった。

このようにして高地の上の前方指揮所に到着した泥んこの野戦車から降りる総書記のずぶ濡れの衣服や泥に塗れた靴を見て、軍人たちは敬礼一つまともにできず突っ立ち、頬を涙で濡らした。

後日、総書記は、自分が先軍政治を実施し、先軍のシンボル五聖山があったがゆえに国を救うことができた、五聖山という名を聞いただけでも涙がにじみ、あの困難に満ちた「苦難の行軍」、強行軍が忘れられないと深い思いをこめて振り返っている。

1996年11月、総書記は厳しい軍事的対決の最前方板門店（パンムンジョム）を視察した。

当時、板門店では、双方間に生じた鋭い未解決の事件について数カ間にわたり激しい談判が続けられていた。

そんなわけで側近の幹部たちは、今は板門店の視察は見合わされるべきだと強く進言したが、総書記は、今こそ板門店を守る兵士たちに会って激励すべき時だとして出発したのである。

思いもよらず不意に総書記の視察を受けることになった兵士たちは、敵兵がすぐに目の前にいることを警戒して万歳を叫ぶわけにいかず、総書記の前で両手を上げて振り、足踏みをするだけだった。

総書記は涙をぽろぽろ流している兵士たちを見回して、その手をいちいち取りながら言った。

「みんなあんまり泣くんじゃない。8・18斧事件の主人公たち

は勇敢でなくちゃならん。わたしはみんなにぜひ会ってみたくて今こうしてやってきたんだ」

続けて総書記は、諸君の手を取った時、わたしの手がつぶれるのではと思った、みんなの背がこんなに高いのを見ると、共和国のバスケットプレーヤーたちがみなここに集まっているようだと言って兵士たちを喜ばせた。

この日、総書記は金日成主席の親筆碑をはじめ板門店の処々を見て歩きながら貴重な教示を残した後、兵士たちと並んで記念写真を撮った。

総書記の板門店視察のニュースは、朝鮮人民ばかりでなく世界の大きな話題となった。

いつだったか総書記は幹部たちに、みなさんはわたしが国の経済事情が苦しい時に工場や農場の現地指導はせず、人民軍部隊にばかり頻繁に出かけたかを理解しなければならない、目の前の一時的な経済的困難に気を奪われ、その解決に奔走したならば、われわれはとっくに滅んでしまったであろうと言った。

新年の正月元旦に錦繡山記念宮殿を後にした総書記の野戦車が、1年の最後の時刻を告げる除夜の鐘の音を聞きながら平壌に帰るまで続けた、止むことのない献身の道があって、この地に社会主義強国の朝が明け始めたのである。

いつか一幹部が、ある人がどう計算したのか、金正日総書記の「苦難の行軍」、強行軍を勝利に向けて指導した日々に歩んだ先軍長征の道は、一つに結び合わせると、地球を何回か取り巻いても余るほどの距離になると言っていますと総書記に話したことがあった。

総書記はこれに答えて、わたしは視察した対象がどれほどだろうかと考えてみたこともなく、視察を行うことで、そこに名誉や評価

というものが伴うだろうと考えたことは一度もなかった、わたしはひたすら国家・民族の自主的な尊厳と利益を守り、わが人民にこの世で最も豊かな開けた生活をもたらさなければという一念で視察の道を歩んでいる、わが国が富強になり、人民が世界で一番豊かに暮らせるようになれば、それ以上何を望むことがあろう、わたしが「苦難の行軍」時に祖国と人民のためにどれほど献身したかは歴史の目撃者たちが後世に語り伝えるだろうと言った。

時代精神の創造

いかなる時代であれ、時代の主流を成す精神によってその時代が評価されるものである。当代の気象に時代精神とそれを体現した人間の魂がこもっているからである。

では、1990年代中頃のあの困難を極めた時代、朝鮮における新時代、先軍時代の精神はいかにして生まれたのであろうか。

立ちはだかる難関を突破して前進するには、悲壮な覚悟とともに、全国、全人民を呼び起こすに足る新しい時代精神が必要であった。

金正日総書記は、それはほかならぬ抗日武装闘争時期のうちでも最も困難な時期に発揮された「苦難の行軍」の精神であると言明した。

金日成主席の決心により、1938年の冬、南牌子から北大頂子へ向けて断行された行軍を朝鮮の歴史は「苦難の行軍」と称している。

1996年10月、総書記は、わが党は現情勢と現実発展の要請に即して、すべての幹部と党員、勤労者たちが「苦難の行軍」の精神をもって生き、闘うべきだとするスローガンを打ち出したとして、

「『苦難の行軍』の精神は、金日成主席の指導の下に抗日革命闘争の最も厳しい時期に革命の命脈をつなぎ、革命の一大高揚を起こした透徹した革命精神、不撓不屈の革命精神です」と語った。

朝鮮人民の意志を試してみようとでもしたのか、当時相次いでのしかかる試練と難関は形状のしようがないほど過酷であった。何もかも不足しているというよりも、無いものがあまりにも多かった。

そんな中でも人民軍の兵士たちは、安辺（アンビョン）青年発電所をこれ見よとばかりに立ち上げた。

1996年6月、建設場を視察した総書記は、水路トンネルは通水式を行う前に入ってみてこそ、軍人たちが万年の大計の偉大な創造物をどう建設したかを確かめることができるとして、みんなが押しとどめるのを振り切って、タイヤが水に浸かる水路トンネルに車を乗り入れた。

軍人たちが壁に書いた標語をヘッドライトの照らす光で一字一字読む総書記の思いは深かった。

トンネルの中で「最高司令官同志の命令を貫徹する前には祖国の青い空を仰ぐな！」という言葉を叫びながら戦闘を繰り広げた軍人たち、停電でトンネルに溜まる岩水を汲み出せず、筏の上に乗って掘進を続けた兵士たちについての話はほかならぬこの水路トンネルであった出来事であった。

総書記はこのような事実をすでに知っていた。それで水路トンネルの中へきっと入って見たいと思い、彼ら優れて誇らしい兵士たちを胸に抱きしめてみたかったのである。

発電所を見て回った総書記は、わが軍人たちが偉大な奇跡を生んだ、万難を排してわたしの命令を必ず貫徹した、まさにこれがわが軍の革命的な軍人精神であるとたたえた。そして、一時的な

困難を前にしてへたばっている人たちに安辺青年発電所を見せてやるべきだ、見学を通じて最高司令官の命令・指示に対する絶対性・無条件性の精神、自力更生、刻苦奮闘の革命精神、集団的英雄主義の崇高な模範など革命的軍人精神を見習うようにすべきだと言った。

その後、革命的軍人精神の真価が世に広く知れ渡り、それは新しい時代精神として全国に胎動し始めた。

その力は大変なものだった。社会主義経済建設の全分野で模範的な成果が相次いで達成され、全国が沸いた。

戦争でもない平和な時期に一つの都市でもない一つの国に加えられる敵対勢力の目に余る封じ込め攻勢は、彼らの期待を裏切って、朝鮮人民を大きく奮起させ、またまた新しい時代精神が生み出されるという結果を招いた。

それがほかならぬ「苦難の行軍」を締めくくるモデルとして、全国に活力を注いだ江界（カンゲ）精神である。江界市は朝鮮北辺に位置する慈江（チャガン）道の道都である。

必勝の革命精神、決死貫徹の精神、自力更生・刻苦奮闘の精神、それに革命的楽観主義は江界精神に一貫している真髄である。

日と共に強まる敵対勢力の政治的・外交的圧力と軍事的威嚇、経済的封じ込めに対処して朝鮮が取るべき道はただ一つ自力更生の道であるが、この道は言うほどに易しい坦々大路ではない。

当時、誰かが比喩したように、犬になってちょっとしっぽを振ったら小屋も与えられ、食べ物にも不自由をしない、小屋の前に小さい庭もあって駆けずり回りもできる、ただ首輪に結ばれた紐がある誰かの手に取られていて少し不自由ではあろうが……。

けれども朝鮮人民の誰もそんな生きざまは快しとせず、骨は折

れても自力更生の道を選んだのである。この道は今こそ生易しくはなくても、幸せの約束された勝利の道であると確信していたがゆえに、朝鮮人民は楽観と希望に満ちていた。

自力更生なくしては一歩も前進しえないのが朝鮮革命の道程ではあったが、1990年代中期以降はとりわけ総書記が自力更生を強力な宝剣として前面に押し立て、朝鮮革命を指導した実に意義の深い日々であった。

外部勢力に依存するのは従属の道、亡国の道であり、自力更生のみが国家・民族の自主性を守り、繁栄を果たしていく道である。時代と歴史の前進過程では革命の環境や条件が異なることもあるが、自らの力に信を置き、自力ですべての問題を解決する革命の原理は変わるわけにはいかない。自力更生にわれわれの生きる道があり勝利があり、未来がある。これは、総書記の不動の信条であった。

いつだったか総書記は過ぎ去った日々を感慨深く振り返り、こう言った。

「わたしは以前、『苦難の行軍』をどう勝利のうちに締めくくるべきかといろいろ考えた末、慈江道をもり立ててモデルにしようと決心しました」

実際、慈江道を「苦難の行軍」を締めくくるモデル道にならせようと決心するまでの総書記の思考は実に深かった。

同道は深い渓谷がとりわけ多い山々を主としているせいで、田畑も少なく、交通の便も悪いなどと、他道に比べて経済的にかなり不利な地域である。そういうわけで、全国がなめている苦難と試練の中でも慈江道のそれは最悪であった。

そうと知りながらも総書記は、ほかならぬその慈江道を苦難と

試練を克服するモデルに作り上げようと決心したのである。

経済的に最も困難な道ではあっても革命的な人民が存在し、信頼するに足る労働者の大部隊を擁しているがゆえに、この道で作り出されるすべてのものがとりわけ貴重であり、その感化力は非常なものである。

それがゆえに慈江道は「苦難の行軍」の時期、総書記とひとかたならぬ因縁を結び、全国的なモデル道に選ばれたのである。

慈江道をモデル道に作り上げる過程に、新たな闘争精神が生み出された。

江界精神と名づけられたこの精神はたちまち全国に波及し、朝鮮人民に立ちはだかる困難や試練を突破する闘いで恐れるものは何もないという決定的な確信を抱かせた。

慈江道の人たちは、その最初の半年間に数十もの中小型発電所を新設し、あるいは整備することで、多くの地方産業工場の生産を活性化し、住民世帯の電気暖房と照明を実現した。

酷い食糧難をものともせず、氷を割って腹の底まで凍える水中に入り発電所のダムを築きながらも、慈江道の人たちは動揺というものを知らなかった。

当時、人民軍は「祖国の防衛も社会主義建設もすべてわれわれが引き受けよう！」というスローガンを掲げて奮闘していたが、慈江道の人たちのそれは「行く道は険しくとも笑顔で行こう！」というスローガンであった。

ある日、某道の幹部協議会を指導していた総書記は、生産計画の遂行を確言できず会議場の雰囲気が凍りついた時、慈江道の人たちは「行く道は険しくとも笑顔で行こう！」というスローガンを貼り付けてにこやかに前進しているにもかかわらず、ここでは

へたばりこんで泣き言を並べていると言って、幹部たちの凍りついた心をたちどころに解き、このスローガンをすべての工場、企業に貼り付け、駿馬にまたがって走っていくようにと力と勇気を奮い起こさせた。

1998年1月、総書記は現地におもむいて慈江道を指導した。

われわれはわが身を惜しむべきでなく、時間を惜しむべきだ、として数百キロもの道を吹雪をついて断行した総書記の現地指導は、零下30℃を上下する酷寒の中で、瞬間の休息も伴わない強行軍であった。

視察を終えた総書記は、慈江道の人民は「苦難の行軍」を続ける逆境にあっても多くのことをやり遂げることで、わが党をいかに支えるべきかの手本を実践的に見せているとして大いに満足し、彼らが発揮している刻苦奮闘の革命精神、不撓不屈の闘争精神、革命的楽観主義を**「江界精神」**と命名し、これを全国が見習うべき闘争精神として押し立てた。

総書記はその後もたびたび慈江道を現地指導して、当地の幹部たちを押し立て、今や自信が生じ、自分が構想して進めようとした道が正しかったとの確信を抱くことができた、慈江道で行ったようにしたら、いかなる困難も克服できるとして、彼らに大きな信頼を寄せた。

総書記が慈江道を現地指導した日々には、次のような話もある。

城干(ソンガン)郡に建てられた発電所の配電室を訪ねた総書記は、発電所のすべての設備が自力更生によって作られたと知って大喜びし、これらの設備がみなわれわれの製品なのですね、100パーセント国産品なのですねと繰り返し反問し、これがわれわれの方式だとして豪快に笑った。

1998年の冬、総書記はある企業の視察を行った。

その数日前、現地指導の途中立ち寄ろうとした時、幹部たちがその企業は生産が不振で見るに値しないとして引き止めるので視察を中止していた。

総書記はそのことにどうにも気持ちが収まらず、無能なわが子には余計に気を使えという言葉がある、だからその企業に行ってみるのが本当だ、党書記と支配人に罰則を適用することになっているというが、きっと行って会ってみよう、そして、彼らに加えられる罰則も取り消すことにしようと言って、列車の向きをかえさせたのである。

企業の生産現場へ足を踏み入れて、職場にずうっと延びている近代的な自動流れ式生産ラインを眺めて、そのすべてが当企業自体の手で作られ装置されたものだと聞いて、総書記は、ここに輸入品は一つもないというのですね、みな自力更生の精神で作ったものです、一から十までみなわが国のものだということがすばらしい、と言って明るく笑った。

自分たちのささいな成果を大きく評価し、生産計画を果たせなかったとして恥じている企業の幹部たちに、それは皆さんのせいだけではない、今後大いに頑張って働けばよいと言う総書記の言葉にみな感激の涙で頬を濡らした。

総書記は、どうしたのです、力強い労働者たちが泣くなんて、今後わたしが責任を持って資材も、隘路もみな解決するから、生産を力一杯することだと激励もし、彼らの緊張をほぐすべく、工場の構内を金剛(クムガン)山休養所や七宝(チルボ)山の休養所よりも立派に作り上げげたとたたえもした。そして、わたしは一体に計画を遂行できなかった工場や企業へ行った場合は記念写真を撮らないことにしてい

るが、皆さんが今年はきっと生産計画を遂行するものと確信して記念写真を撮ろうと言い、みんなと並んで記念撮影を行った。

いつだったか総書記は、慈江道を現地指導した日々を振り返り、こう回顧した。

「今考えてみると、『苦難の行軍』当時、わたしに最大の力を与えてくれたのは江界精神でした。江界精神は、われわれの革命が最も困難だった時期にわたしに力を与え、意志を固めさせ、わが人民の『苦難の行軍』、強行軍を勝利をもって進めるようにしてくれました。わたしは江界精神を永遠に忘れないでしょう」

「苦難の行軍」、強行軍の時期、朝鮮人民は誰もが江界と慈江道を心の中に抱いて生き、どこにあっても江界精神について語り合った。

江界精神は、城鋼と羅南(ラナム)、楽元と降仙はもとより、全国全分野に新たな闘争精神、闘争の烽火を燃え上がらせ、社会主義強国建設という巨大な進軍を予告した。

繁栄の種をまいて

万難を排して「苦難の行軍」、強行軍を断行した実りは実に大きかった。

あの困難を極めた時期に、安辺青年発電所が立ち上げられ、引き続き全国各地に大規模水力発電所や中小型水力発電所が大々的に建設され始めた。

金属工業部門ではコークスに依存しないチュチェ鉄生産システムが確立し、他方、大規模な耕地整理事業を通して、全国的にこまごました田地はすべて規格化された大型の田地に整理され、また規模の大きな自流式水路の建設が処々で進められた。

両江(リャンガン)道の大紅丹(テホンタン)郡からジャガイモ栽培革命の火の手が燃え広がり、各地の農場で二毛作、三毛作の経験が積まれた。

金正日総書記が、最初視察をする時はめくるめく思いをした、自分がその課題を示せば企業の幹部たちが茫然自失するだろうと思ったと言ったその2・8ビナロン連合企業所が、2010年2月、ビナロンの大量生産を再開した。

咸鏡(ハムギョン)南道ではこの他にも、マグネシアクリンカー工業の主体化を確立し、肥料生産の主体化を遂げる見通しを確実に立てるなど、新たな大高揚の炎、咸南の炎が上がり、それは全国に燃え広がった。

江原道では、元山(ウォンサン)青年発電所、元山牧場などが次々に立ち上げられ、平安(ピョンアン)北道では大渓島の奇跡と言われた大渓(テゲ)島干拓工事が完了した。

これらの相次ぐ成果に、人々は福運が多発的・連続的に巡って来ているとして喜んだ。

総書記の人民に尽くす献身の足跡は、2011年に至り急増した。

初春の肌寒さが身にしみる3月、総書記は咸興(ハムフン)毛紡織工場を訪れた。

工場の視察後総書記は、今日咸興毛紡織工場を見て大きな満足を覚えた、去年、2・8ビナロン連合企業所では16年ぶりにビナロンの大量生産を再開して全国に大慶事をもたらしたが、今日は咸興毛紡織工場で17年ぶりにビナロンの織物が生産されているのはなんとも喜びに耐えないと言った。

そして工場を後にする時、咸興毛紡織工場はビナロン製品を大々

的に生産して商店に送り出すことだ、この工場が上質の製品をいかに多く生産しているかということは、商店に行ってみれば分かる、この次には当工場の製品を売る商店へ行ってみると言った。

平壌の女性たちの間で「烽火(ポンファ)」せっけんの噂が広まり、人気が高まっていた2011年5月、総書記は烽火せっけん工場を訪れた。

当工場の洗濯せっけんは泡が良く立つので人気が高いという説明を聞いた総書記は、烽火せっけん工場は新世紀の世界の趨勢と絶えず高まる人々の文化生活水準に即してせっけんの品質を引き続き高め、生産量を増やさなければならないと指摘した。

総書記は、軽工業部門の各単位が互いに競争を繰り広げ、その過程で消費財の品質を一段と高めて人民の生活の向上に積極的に役立たせるべく、第2回平壌第1百貨店商品展示会を開催するよう手配し、7月に展示場を視察した。

展示場の各コーナーを丹念に見て歩いた総書記は、商品の一つひとつとそれらの指標に至るまで目をこらし、商品の保障などサービス関連の課題と方途についてもいちいち教え、自分は今後随時ここへやって来て、販売とサービスの状況を確かめてみるつもりだと言った。

人民の生活の向上を最高の重大事、最大の目標とし、人民の増大する幸福を喜びとして、新年の初めから1年中現地指導を止むことなく続けた総書記の献身的な努力は実を結び、2011年、軽工業部門では飛躍と革新の炎が高々と燃え上がった。

総書記は、食糧問題、食の問題をなんとしても解決すべく、2011年、各地の協同農場をはじめ養魚場、果樹農場、アヒル工場などを現地で指導した。

2011年3月、総書記は平壌野菜科学研究所を訪れた。

この研究所が新しく育種した多収穫野菜の諸品種の陳列台を見渡した総書記は、優良品種はみなここに集まっているようだ、実にすばらしい、まるで八百屋に来たような思いだ、と言い、ふと、ここに雪蘭花はないのかと聞いた。

雪蘭花はまだありませんという申し訳なさそうな返答を聞いた総書記は、外国では雪蘭花を総合ビタミン剤だとして喜んで食べている、その種子を輸入して大々的に栽培すると良いと言った。

総書記は10月、咸鏡南道咸州(ハムジュ)郡の東峰(トンボン)協同農場を視察した。

近来のどの年よりも日照率が低く、冷害が酷かったにもかかわらず、穀物の生産計画を立派に果たし、前年は公共建築や住宅を新築してそのメタンガス化を実現し、今年も住宅のメタンガス化を進めたと聞いて喜び、大きくたたえた総書記は、朝鮮東海に面した協同農場で生産を高めるには、不利な天候条件を克服する対策を十分に立てなければならないとして、穀物増産の方途について具体的に説明した。

同年5月に龍田(リョンジョン)果樹農場を視察した時も総書記は、当農場の上げた成果を大きくたたえて、たいそうなものだとしながら、この農場が大同江(テドンガン)果樹総合農場と異なる点は何かと聞いた。

思いがけない質問に、ちょっと考えていた農場の幹部が、「果樹栽培の技術では引けをとりませんが、栽培面積が小さいのです」となんとなく残念そうに答えた。

総書記は、うむ、龍田果樹農場が果樹の栽培技術で大同江果樹総合農場のそれに劣らないとしたら、大同江果樹総合農場との相違は単に果樹面積が小さいという点だけではないかとして、龍田にりんごの研究所を設けるべきだ、りんごの栽培では解決の待たれる科学技術上の問題が多々ある、欧米諸国など果樹栽培業の進

んだ国々から良品種のりんごの木を買ってきてわが国の気候風土に順化させて広め、すでに取り入れてある上質のりんごの特性を維持し、その特有の味を変わりなく保とうとしても多くの問題が解決されなければならないと述べた。

総書記は、農場を辞するに先立って、龍田果樹農場は大同江果樹総合農場と果樹畑の面積を増やす競争をすべきではなく、美味なりんごを生産する競争について考えなければならないと言った。

金正日総書記の熱烈な人民愛は、祖国を離れて遠い外国の地にいても変わりがなく、常に人民に思いを馳せていた。

生涯の最後の年である2011年に行った中国及びロシアのシベリア並びに極東地域を訪問した際も同様であった。

朝中友好の強化を図ってたびたび中国を訪問していた総書記は、そのどの地においても祖国人民の生活問題に深い関心を向けていた。

2011年5月、中国訪問の最初の日に行われた宴会場で聞いてみた、農村住宅の暖房についての話がある。

この日、鏡泊湖を見て回った総書記は、3時間もの間車を走らせて牡丹江市海林農場と農場が運営している乳牛牧場を見学した。

農場の管理事務所で総合的な説明を受け、若い夫婦が住んでいる農家に案内された総書記は、家族は何人か、住宅の建坪はどれくらいで、家はいくら払って買ったのか、メタンガスで炊飯をするとのことだが火力は強いのかなどと詳しく聞いたあと、乳牛牧場を訪れた。

牧場の生産と運営についての質問は極めて具体的であった。

この牧場では主にどの品種の乳牛を飼っているのですか？

「オーストラリアから輸入したホルスタイン乳牛を飼っています」

乳牛1頭当たりの1日の飼料単位はどれほどですか？

「乳牛1頭は日に20キログラムの飼料を食べ、30キログラムの牛乳を出します」

20キログラムを食べて30キログラムを出すんですって？

総書記は不思議そうに相手の顔を見つめた。

彼は、おっと言って答え直した。

「日に20キログラムではなく30キログラムの飼料を食べ、30キログラムではなく20キログラムの牛乳を出します。30キログラムのうち10キログラムが穀物飼料です」

こう答えながらも彼は、やはり今度も総書記の質問に合った返答をしていないということ、つまり飼料単位について質問しているのに、飼料の量と勘違いして答えていることに気づいていなかった。

総書記はただ笑っただけで、質問を続けた。

乳牛の品種の拡大再生産はどんな方法でなされているのか、乳牛の年間淘汰率は何パーセントか、穀物飼料は主に何を与えているのかなどと聞いた総書記は、こういった。

この乳牛牧場は、全的に環状循環生産システムで運営されていると言えます。

その日の夕方、牡丹江市のあるホテルで行われた宴会の最中、総書記は、省党書記に尋ねた。

わたしは今日、農場の住宅を見て回った際、質問できなかったことが一つあります。農場の住宅では暖房をどういうふうにしているのですか。もしかしたら電気暖房ではありませんか。

愉快に進んでいる宴会の雰囲気とはちぐはぐな農場住宅の暖房問題についての思いがけない質問に省党書記はおやっと思った

が、それが人民の生活に対する深い思いやりに起因した質問だと思い当たったのか、目を輝かせて答えた。

「電気暖房ではありません。乳牛牧場の後ろに6000キロワットのメタンガス発電所が一つありますが、そこから出る余熱で蒸気を作り、農家の暖房を行っているのです」

ああ、そうですか、すぐれた経験です。

総書記はこくりとうなずいた。

中国華東地域の江蘇省楊州市では、こんなこともあった。

長江に発して中国の北と南の地域を結ぶ大運河の沿岸にある楊州市は、風光にすぐれた有名な観光地である。ことに楊州市の秀瑞湖はさして大きい湖ではないが、風致秀麗の絶勝である。

その名に秀麗でみずみずしい美人だという意味がこもっているこの人工湖を、中国の歴代の皇帝が訪れたものだとされているが、清の乾隆皇帝は6回もここで遊んだという。

この湖に、中国を訪れた金日成主席が遊覧船「乾隆」号に乗ってその風致を楽しんだというわれもある。

楊州市では総書記をここへ案内すべく、いろいろと誠意を尽くした。

バッテリー車の通行の妨げになる杭の欄干をすべて抜き取り、花園も一段と美しく手入れし、一切の観光客の出入りを禁止した。

ところが、総書記は秀瑞湖の遊覧には随員たちだけを送り、自身はスケジュールに予定されていない市内のあるスーパーマーケットを見学した。

総書記は、買い物客で雑踏しているスーパーマーケットの売り場を一つひとつ見て歩き、人民の生活の向上に役立つ点はどのようなものかと考えた。

2階の売り場をすっかり見たあと、足を返して食用油売り場をもう一度見ようと言うので随員たちはいぶかったが、総書記は楊州市の人たちがふだんどんな食用油を好んで使っているかを聞いた。

売り場で楊州市党書記が一体に大豆油が好まれていると答えると、大豆油瓶を手に取り、精製品かどうか、どんな商標なのかなどとこまごまと確かめてみた。

楊州市にやって来る人なら誰でも訪れる秀瑞湖は総書記の来訪を待ち続けたが、総書記は愛してやまない祖国の人民の生活に思いを致してスーパーマーケットへの道を選んだのであった。

その日の夕方も、また翌朝楊州市を発つことになった時も、市党書記が総書記を秀瑞湖に案内できなかったことでひどく残念がると、総書記は、今後またお国を訪れる機会にはここ楊州へ来てきっと秀瑞湖を遊覧すると約束した。

北京に向かって走る列車の中で、同行した中国国務委員が秀瑞湖の大自然の中へ総書記同志を案内できなかったことが惜しまれてならないと言った時にも総書記は、**今度秀瑞湖を見ることができませんでしたが、見残しておく対象があったら、この次にまた行くという口実を設けることができるではありませんか**、と微笑んで言った。

同年8月のロシア訪問の際も、総書記の胸中には人民という存在がこびりついて離れなかった。

ある日の参観計画に民俗博物館の見学が含まれていたが、総書記は一般の住民たちの生活水準を確かめてみることがより重要だとして、スーパーマーケット「メガチタン」に見学対象を変更させた。

急に見学対象が変更されたので、スーパーマーケットにはいつ

もと変わりのない買い物客の混雑風景が繰り広げられていた。

総書記はそれら買い物客たちに混じって売り場を見て歩き、同行したロシア人幹部に、商品の仕入れや売れ行きについて具体的に聞いた。

食用油売り場の前で歩みを止めた総書記は、ここで売っている食用油の種類はどれほどか、去る5月中国を訪問した際、あるスーパーマーケットでは20余種の食用油が売られていたが、ここではどの種の食用油の需要を一番満たせないでいるのかと尋ねもした。

売り場を巡りながら総書記の質問は続いた。

これらは国産品か、それとも輸入品か、生魚も売るのか、住民の一人当たりのパンの需要量はどれほどか、品切れの場合はどうするのか、1日に客は何人ほど来るのか、1日の売り上げはどのぐらいか、年間の収入はいかほどか……。

一国の指導者が商業サービス部門に関してこれほど深い関心を向けているのは、単なる好奇心によるものではなく、祖国の人民の生活問題と結びつけてなされているものと気づき、ロシア人随行者たちはいたく心を打たれた。

総書記の胸中にはひたすら人民のみがあり、その外国訪問も、人民の生活の向上という一つの目標を指向していると言えた。

金正日総書記は、生涯の最後の月である2011年12月のあの日にも、ハナ音楽情報センターと光復(クァンボク)地区商業センターを視察した。

その翌日の2011年12月16日午後9時頃、総書記は平壌市民に外国から買い入れた魚類を供給する対策を立てた後、列車に乗って現地指導の道についた。

その道は、誰も押し止めることのできない為民献身の道であった。

＊　＊　＊

2011年12月19日12時、朝鮮中央テレビとラジオ放送は、次のような重大ニュースを流した。

「……

偉大な指導者金正日同志がチュチェ100(2011)年12月17日8時30分、現地指導の途上急病で死去されたことを最も悲痛な思いをこめて伝える。……」

ニュースを聞いて人々は驚愕し、呆然として体をこわばらせた。あまりものショックに地球が身ぶるいし、世界の大地が揺れ動いているかと思われた。

全世界に放映された当時の状況をそのままここに書くわけにはいかないが、その一端のみを伝えることにする。

12月28日、40数キロになんなんとする首都の路上に市民たちが群れをなして立ち並んだ。

永別の日であった。

人々の目は赤く充血していた。総書記と明日は永遠に別れるという悲痛な思いで、みな一睡もしていなかったのである。

降っても降ってもいつ止むとも知れず、雪は降り続けた。

霊柩車は厳かな静粛に包まれた永別の道へ入り、走っていた。

たちまちにして涙の海が現出した。

どうにか自制していた市民たちはこみ上げる悲しみに打ち勝てず、知らず知らず人道から車道へと一歩一歩足を踏み出し、やがて制止者たちを押しのけて霊柩車の前へ立ちはだかった。

それはいかなる力をもってしても押しとどめることができず、

どの誰も制止できなかった。

千万の人たちがものを言っても同じ一つの言葉であり、千万の隊伍が歩みを歩んでも同じ姿勢だと世界が感嘆して止まないその朝鮮人民が、この日、大波が岩にぶつかってさんざんに砕かれるように、車道一杯に群がり、われ勝ちに霊柩車を取り囲んだのである。

やっとのことで群集の中から抜け出した霊柩車は、いくらも走らず同じうき目に遭った。

このようにして、ついには送葬の行列が切れ切れになるという場面も生じた。

総書記は、生涯人民と共に生き、人民のためにすべてを尽くしたがゆえに、永別に際しても人民の中にあったのである。それがゆえに、12月28日は永別の日でなく、総書記が人民の中へ再び戻ってきた日であった。

白頭山にてパルチザンの子として生まれ、生涯人民の子として人民の中で生きた金正日総書記は、朝鮮人民の胸中に人民の指導者という親しみのこもる呼称として秘められて永遠に生き続けているのである。

人民の指導者

執　筆：金仁哲
編　集：安鉄鋼，張香玉
翻　訳：金時習、金光哲
発　行：朝鮮民主主義人民共和国
　　　　外国文出版社
発行日：チュチェ111（2022）年2月

E-mail: flph@star-co.net.kp
http://www.korean-books.com.kp

朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
チュチェ111(2022)

ISBN 978-9946-0-2102-7
9 789946 021027 >